

アルチュール・ド・ゴビノーの人種哲学（二）

——『人種不平等論』を中心に——

長谷川 一年

はじめに

一 人種と文明

二 歴史とデカダンス（以上本号）

三 近代とペシミズム

むすびにかえて——ゴビニスムの行方

はじめに

ナチスのホロコーストを通過した今日、みずからすすんで人種主義者を名乗る者はいない。反ユダヤ主義のもたらした未曾有の蛮行に対する反省は、人種にまつわる言説の非科学性を暴き出し、およそあらゆる人種主義が非合理的

な迷信にはかならないことを証明しているからだ。一九四五年以降、人種について語ることはつねにある種の困難を伴い、人種という概念自体に疑惑と警戒の目が向けられている。

人種主義を理論的に反駁すること、現実に存在する様々な人種差別に反対していくことは当然である。しかし人種主義への憎悪が、今度は「反人種主義」を絶対的なイデオロギーの座に祭り上げ、それによって抑圧的な言説空間を醸成しているとしたらどうだろうか？ 反ユダヤ主義研究の泰斗レオン・ポリアコフは、人種に関して科学的に考察しようとするときに生ずる「自己^{オート・サンシュール}検閲」について指摘している。「あたかも人種主義者であることを恥じたり、恐れたりするあまり、西欧がかつて人種主義であったことを認めようとせずに、たいしたことのない人物(ゴビノー、H・チェンバレンなど)に悪を肩がわりさせるように、すべては、⁽¹⁾こんでいる」。この自己検閲は、人種主義の全責任をドイツに転嫁することによって完璧なものになる。西欧思想の内奥に巣食う人種主義の腫瘍を摘出することこそが問題であったにもかかわらず、有象無象の「人種主義者」を断罪し、彼らを西欧思想史の本流からの逸脱、ドイツにおける例外的な事例として処理することで、すべて落着いたかのように安堵しているというわけだ。そしてフランス思想史の正統にとって、悪を肩代わりさせるのに最も好都合な人物、ファシズムの土壌を整備した「フランス・イデオロギー」の厄介払いにはうってつけの思想家こそ、ジョゼフ・アルチュール・ド・ゴビノー⁽²⁾(Joseph Arthur de Gobineau, 1816-1882)であった。本稿はこの呪われた思想家の人種哲学を、その主著『人種不平等論』(*Essai sur l'inégalité des races humaines*, 1853-1855)を中心に考察する試みである。

ゴビノーは一八一六年七月十四日、パリ近郊の町ヴィル・ダヴレーに生まれた。少年時代から家庭教師についてドイツ語を学んだり、十代の一時期を送ったスイスではオリエントの諸言語に興味を示すなど、語学的な関心の強い子供ではあったが、健康上の理由もあって正規の学校教育はほとんど受けていない。父の勧めたサンシールの士官学校を受験に失敗して、伯父の援助を頼みに、身一つでパリに出たのは十九歳の秋のこと。野心的な青年は、ひとまず無給の定員外職員としてガス会社に籍を置き、コレージュ・ド・フランスでペルシア語の授業を聴講しながら、サロンに出入りして顔売り込み、立身出世の有力な縁故を探しまわった。七月王政下の首都はしかし、若きゴビノーの夢想をおいそれと叶えてくれるほど甘くはなく、そのうち伯父からの経済的支援は打ち切られ、職もなく生活は困窮する羽目に陥る。鼻っばしだけは人一倍強いジュリアン・ソレルばりの野心家は、金銭ずくの体質に浸かりきったブルジョワ支配体制を憎み、無能で無節操な政治家ばかりの跋扈するパリを徹底的に軽蔑した。そして政治評論や文芸批評、詩や小説などの創作活動を手掛けるようになって、売文によって何とか糊口をしのぎながら、二十代のゴビノーは雌伏し続けたのである。

この間、一八四三年四月には、ある代議士のサロンでトクヴィル (Alexis de Tocqueville, 1805-1859) と知り合っている。⁽³⁾ゴビノーの政治評論を高く買っていたトクヴィルは、準備中であつたアカデミー報告のための資料の一部、ドイツとイギリスの哲学に関して協力を求め、また自分の雑誌『ル・コメルス』 (Le Commerce) に論文を発表させるなどして、陰に陽に十一歳年少のゴビノーを助けた。この邂逅はある意味でゴビノーの人生を決定づけたと言つてよい。二月革命後、一八四九年六月に成立したバロ内閣に外務大臣として入閣したトクヴィルは、ゴビノーを外務省

の官房長官に起用したのである。

一八四八年の二月革命に対して、ゴビノーは批判的だった。リシュリユー以来の中央集権化が、フランスの生ける身体であるコミュニケーションとプロヴァンスを圧殺したと考えるゴビノーにとって、フランス革命はバーク(Burke, 1729-1797)の看破したとおり、パリによる地方の篡奪であり、国家権力の強化にほかならなかったが、四八年の首都は、そのような革命を助長する都市という空間と、そこに集まる匿名化した群衆に対する嫌悪を、いっそう激しく掻き立てたのである。この時期ゴビノーは、年来の地方分権の主張を実現させるべく、トクヴィルのいところであるルイ・ド・ケルゴルレ(Louis de Kergorlay)とともに雑誌『地方評論』(*La Revue Provinciale*)を刊行している。「部分的祖国への愛なくして、全体的祖国への愛なし」を信条に、自由と秩序の調和をフランスにもたらそうとしたこの雑誌は、わずか一年で廃刊の運びとなるが、国家、都市、群衆に対する嫌悪は、生涯ゴビノーを離れることはなかった。

つい昨日まで憎悪していた政治的混乱から新しい道が開け、生活の安定が保障されたのはいかにも皮肉であるが、バロ内閣自体は短命で十月には瓦解してしまう。トクヴィルは外務大臣の職を退いたが、ようやくの思いでありついた公職を手放すわけにいかないゴビノーは、幸いにもトクヴィルの後任が父親の元同僚であったことから、翌月にはスイス・ベルンの公使館に一等書記官の地位を得ることができた。そしてこの後、ハノーファー、フランクフルト、テヘラン、アテネ、リオデジャネイロ、ストックホルムなどの各地に赴任して、第二帝政から第三共和政の初期にかけて、最後は事実上更迭されるまでの三十年近くを国外で過ごすことになるのである。

こうして当人も予想しなかったほど長期に及んだ外交官生活だが、フランス外交史におけるゴビノーの業績については、ここで取り立てて言うべきことはない。必ずしも職務に熱心ではなく、体制に忠実でもなかった一官吏の名前がいまも記憶されているのは、時の政府に奉職するかたわら執筆された何冊かの著作によっている。文学方面では、赴任地ブラジルで一夜にして書き上げた短篇小説『アデライド』(Adelaide, 1869)、秀作の誉れ高い長篇小説『プレイヤー』(Les Pleiades, 1874)、晩年の哲学的戯曲『ルネサンス』(La Renaissance, 1877)などが比較的良好に知られている。また少年時代から憧れていたオリエント世界での勤務滞在は、現地を舞台にした異国的な幻想小説を収めた『アジア小説集』(Nouvelles asiatiques, 1876)を生み出したし、『中央アジアにおける宗教と哲学』(Les Religions et les Philosophies dans l'Asie centrale, 1865)や『ペルシア人の歴史』(Histoire des Perses, 1869)のようなオリエンタリスト東洋学者としての研究をも可能にした。これ以外にも旅行記の類や楔形文字の解説書、またゴビノー家の系譜を北方ヴァイキングの王に遡って跡づけるという奇妙な作品まで残しているのだが、思想家ゴビノーの存在を、その悪名とともに今日に伝えている代表作が『人種不平等論』であることに疑いの余地はない。

いずれにせよゴビノーの著述活動の幅広さは、そのエクリヴァンとしての豊かな才能を証立てていると同時に、彼の全体像を複雑で理解しづらくしていることも確かである。複数の顔を持つゴビノーの活躍ぶりは、生涯無二の親友であったオーストリアの外交官プロケッシュ・オステン(Prokesch-Osten)の目には、万事に通暁したミケランジェロのごとく映じたいが、ゴビノーの死後百年を経た現在では、等身大の実像を捉えようとする伝記的研究が進んだ結果、彼にまつわる神話や伝説は次第に剥ぎ取られ、ゴビノーの生い立ち、特にその家族関係を足掛かりにし

て、多岐にわたる著作群を読み解くことが一般的になった。⁽⁴⁾すなわち「生まれの不安」に取り憑かれた著者の「自我の探求」という一貫したパースペクティヴのもとに、ゴビノーの広大な作品世界は理解できるというのである。それでは「生まれの不安」とは何か？

ゴビノー家はもともとボルドーに根拠を持つ有力なブルジョワで、ボルドー市議会に議員を送り込む名家であったが、十六世紀末その地で築き上げてきた財は——大革命によって没収されたように体裁をつくろっていたけれども——アルチュールの父ルイ (Louis de Gobineau) とその兄チボー＝ジョゼフ (Thibault-Joseph de Gobineau) の華美な暮らし向きのせいで、旧体制の最後の時期には底をついていた。二人は熱烈な王党派で、ルイは一八一三年、ブルボン王家を支持するポリニャック (Polignac) 兄弟の逃亡を助けた廉で逮捕され、翌年三月までサント＝ペラジー監獄に投獄されている。釈放されてからも、ルイは絶えず王に付き随い、執拗に運動して、ついに一八一五年十月、近衛第二連隊の大尉に任命してもらった。

すでにルイは一八一〇年、アンヌ・ルイーズ・マドレーヌ・ド・ゲルシー (Anne Louise Madeleine de Gercy) という名の、ルイ十五世の私生児と噂された父とサン＝ドミンゴ島出身のクレオール之母を両親に持つ女性と結婚していた。ルイが生来、柔和で意志薄弱なところがあつたのとは対照的に、マドレーヌは勝気で奔放な女であった。しかも彼女はボナパルティストであり、結婚してからポリニャックの事件が起こるまで、夫が王党派であることを知らなかったらしい。こうして性格的にも政治的にも水と油の二人だが、元来が派手好みの社交家で、女性としての自由が

欲しかっただけのマドレーヌにとって、しょせんこの結婚は「愛のない結婚」であり、それにはルイも気づいていた⁽⁵⁾と言おう。

そんな夫婦に最初の子アルチュールが生まれたのは、一八一六年の革命記念日であった。ゴビノーは後年、妹に宛てた手紙のなかで「私は七月十四日生れだが、同じ日にバスチーユが襲われた。これは正反対のことが隣り合うことを示している⁽⁶⁾」と書いているが、終生「自由・平等・博愛」のスローガンに背を向けた反革命の態度は父親譲りのものだったろう。次に誕生した長女は幼くして亡くなったが、一八二〇年には次女カロリーヌ (Caroline)、一八二四年には三女スザンヌ (Suzanne) が生まれている。しかしこの姉妹については、カロリーヌはルーヴル美術館の館長シャルル・ド・クララク (Charles de Clarac) の子であると言われており、またスザンヌはシャルル・ソタン・ド・ラ・コアンディエール (Charles Sotin de la Coindière) という、アルチュールの家庭教師との間にできた子で、ルイに認知を拒まれているのだ。この尻軽な母の行動こそが、神経質で体も弱かったゴビノー少年に、一生消え去ることのない精神的傷痕を刻みつけることになる。

マドレーヌの不品行は、これだけでは終わらない。すでに長男の生まれる前から冷え切っていた夫婦仲は、一八二二年にルイがピレネー地方へ赴任することになると物理的にも距離が広がって、マドレーヌは何の遠慮もなく夫とは別行動をとり始める。息子の家庭教師を愛人にして、幼い子供たちの手を引きながら、フランスの各地を転々としてまわり、必要な資金は詐欺行為によって稼ぐという、恐るべき奔放ぶりで、一八三〇年にはフランス司法警察の追手を逃れてスイスに入った。少年にとって唯一幸運だったのは、この地で上達させたドイツ語が、後に外交官としての

キャリアに生きていくことくらいであろう。欠席裁判で懲役十年の判決を受け、身柄の引渡しを要求されている母はなお逃亡生活が続けるが、アルチュールは一八三三年、七月王政下での軍職を潔しとせず退役してブルターニュにいた父のもとに呼び戻された。そこで通い始めた地元のコレージュは、まもなく「不従順」を理由に放校処分となり、そして士官学校をかたちだけ受験すると、単身パリへと向かったのだった……。

ゴビノーにとって、母親の身持ちの悪さは、自分も彼女の不義から生まれたのではないかという疑念、自分の父親が誰だか分からないという不安を絶えず引き起こし、確固としたアイデンティティを持つことを許さぬトラウマとなった。このような「生まれの不安」が、ゴビノーにアイデンティティの基盤としての「血」を強く意識させた。「血」への執着は、実生活においても、創作の世界においても、はっきりと現れている。彼はある時期から、みずからの名前に《de》を付して貴族を名乗り、さらに「伯爵」(comte)を自称し、伯父の残してくれた遺産でトリイに城館を購入するなどして、おのれの「血」の由緒正しさを誇示しようとした。むろんこれらはゴビノー自身の内面のみ根拠を持つ行為であり、そこにはありうべき現実によって実際の父母と絶縁しようとする意図が多分に含まれていたことは明らかである。

そのあまりにも苛酷な現実から眼を背けたゴビノーはまた、書くことに救いを求めた。自分の夢に合致するような別種の「現実」の構築に赴いた詩人にとって、文学は避難所であった。高貴さを身に纏った「王の息子たち」(les des rois)の恋愛を主題とした『プレイヤード』などは、貴族性を希求し続けたゴビノーの面目が躍如とした大作で

あると言えよう。しかし、高貴さの存在する可能性、いわば「詩人」ゴビノーの明るい側面が小説の世界に投影されているとすれば、これから本稿が議題の中心にする『人種不平等論』は、「科学者」ゴビノーの見た暗鬱な現実、その暗さの縮図といった観を呈している。「家族への憎悪」がここでは「人間への憎悪」に増幅され、執筆のモチベーションを支えている。ジャン・ゴミエの表現を借りれば、「一種の形而上学的な怒りがゴビノーを突き動かしている。それは単に社会とその愚劣さに対してだけでなく、人間の条件そのものに対する反逆なのである」⁽⁷⁾。しかもその苛立ちは「文明の没落」の予感、あるいは「人類の滅亡」の確信に固く結びついている。この強迫観念と化した深いペシミズムこそ、ゴビノーの著作活動の根底にあつて、その思想の個性を象る原質であることを、われわれは後に見るであろう。

ブレイヤード版にして千頁あまりの頗る浩瀚なこの著作が、ゴビノーのコスモロジーにおいてどのような位置を占めているのかを見定めるには、これが『ペルシア人の歴史』と『ノルマンディー・ブレー地方の征服者、ノルウェー海賊、オッタール・ジャールとその後裔の歴史』(*Histoire d'Ottar-Jarl, pirate norvégien, conquérant du pays de Bray en Normandie et de sa descendance*, 1879) とを合わせた三部作の一環をなしていることを想起すべきである。前者は『人種不平等論』において展開された一般的な命題を再確認するために、アーリア人種の一つであるペルシア人に焦点を合わせ、二度にわたるペルシア赴任で得られた見聞を交えて綴られた歴史書、後者は幼くして「生まれの不安」を抱え込んだ著者が、自分の素性を明らかにしたいという一心から、ゴビノー家をアーリア系北方ヴァイキングの末裔に位置づけた、一種の誇大妄想的な想像力の産物である。⁽⁸⁾「汝自身を知れ」という格言に憑かれたゴビノー

の理論的営為が、全人類史を視野に収めた人種研究から始まって、一民族の歴史を照射する作業を経て、最終的に人種的自己証明に極まったとすれば、『人種不平等論』は人類の包括的研究にして自我探求の原点でもあったと言ってよい。事実、死後出版となった同書第二版への序文にはこう書かれていた。「いずれにせよ、本書は私がなしたこと、今後なすであろうこと一切の基礎である。言ってみれば、私は子供の頃からそれに取りかかったのだ。それは私の持つて生まれた本能の表現である⁽⁹⁾」。

「生まれの不安」に駆られた男の「本能の表現」。それは一見、個人的な心情を吐露しただけのロマン主義的な「自我の詩」を思わせる。しかし『人種不平等論』の目的は——少なくともゴビノー本人の意図では——「人種の不平等」を鍵に人類史の全事象を科学的に説明しつくすことにあった。「歴史を自然諸科学の一部門に入れることが重要である⁽¹⁰⁾」と考えていたゴビノーは、執筆にあたって、フランス語文献はもとより、ドイツ語や英語の龐大な資料を駆使し、ギリシア語やラテン語、ときにはオリエント諸語の知識をも動員しながら、民族学・人類学・生理学・言語学等の知見を糾合して、何よりもまずコンスタティヴな論証を目指した。そしてゴビノー自身は、本書によって所期の目的は実現され、「十分に証明された数学的真理⁽¹¹⁾」の域に達していると自負していたのである。

もちろん、特別な学問的訓練を積んだわけでもない一介の独学者の手になる書物である。実際には「著者が果たして正常な知能をもっているのかと疑いたくなる⁽¹²⁾」ような矛盾と誤謬も散見されようし、「学問の歴史において、かくも高遠な目的が、かくも不適當な手段によって追求されたことは、おそらく他に例がないであろう⁽¹³⁾」と非難されるのも仕方あるまい。語学力にしても本当は怪しいものだ。けれども、そんな出鱈目だらけの本にナチスの人種政策の指

南書という容疑がかけられているわけで、これを単に噴飯物と切って捨てるだけでは済まされないだろう。われわれはここにゴビノーの所論をできるだけ忠実かつリーダーダブルなたちで再構成して、その人種哲学の稜線を明らかにしたいと思う。

(1) レオン・ボリアコフ『アーリア神話 ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』アーリア主義研究会訳(法政大学出版局、一九八五年)九頁。強調は原文。

(2) 福田和也氏も、フランス本国ではまったく無視されたゴビノーの思想が人種主義のレッテルを貼られた原因の一つとして「ドイツとの強い関係」を挙げて、次のように記している。「あたかもフランスの知識人たちには、十八世紀以来、ヴォルテール、ミシュレ、サンシモンにまでおよぶ人種主義の潮流を、忘却してフランス思想史から切り離し、ライン河の彼岸にのみ信奉者をもつフランスの作家、しかしフランス文学史にはどのような跡もとどめていない、私生児であり、流刑に付された一人の作家の名前に集約することで、フランスを人種主義から浄化し、人種主義をフランスとは無縁な、ドイツに固有なものであるかに思わせるような、無意識の作為でも働いているかのよう」『奇妙な廃墟 フランスにおける反近代主義の系譜とコラボトゥール』(国書刊行会、一九八九年)四九頁。

(3) トクヴィルとゴビノーの思想的関係については別稿を用意する必要がある。その際には、キリスト教に対する態度、デモクラシーの歴史的位位置づけ、アメリカに関する評価などが論点として考察されなければならないだろう。

(4) 本稿におけるゴビノーの伝記的事実に関しては次の研究に多くを負う。Jean Gaumier, *Spectre de Gobineau*, Jean-Jacques Pauvert, 1965. Jean Boissel, *Gobineau, biographie, mythes et réalité*, Berg International, 1993. またブレイヤード版著作集(全三巻)に付されたゴミエ作成の詳細な年譜も有益である。

(5) ゴビノー自身も一八四六年、マルティニック島出身のクレオール女性クレマン・モノロ(Clémente Monnerot)と結婚しているが、これまた友人の捨てた女性を「騎士道精神」から救ったにすぎない「愛のない結婚」であったという証言がある。クレマンは夫のすることには理解がなく、何よりも物質的豊かさを追い求める浪費家であった。当然のように結婚生

活はうまくいかず、やがて夫は単身赴任を重ねるようになる。後にゴビノーは妹に宛てた手紙で、結婚生活は「永遠の地獄」だと漏らしている。一八七五年四月二七日づけ妹カロリーヌ宛ての手紙。Comte de Gobineau, *Mère Bénédicte de Gobineau, Correspondance 1872-82*, publiée et annotée par A. B. Duff, Mercure de France, 1958, vol. 1, p. 167. なお体の不自由であったカロリーヌは、一八六八年四月以来、ベネディクト会の修道女として隠遁生活を送っていた。

(6) 一八七七年七月二三日づけ妹カロリーヌ宛ての手紙。Ibid., p. 266.

(7) Gaumnier, *op. cit.*, p. 59.

(8) ゴーミエはこの三部作について次のように述べている。「ゴビノーの作品は『新曲』の陰鬱な複製のごとく(つねに彼がダンテをおおいに称讃していたこと、一八六三年の一時期、『天国篇』を解釈する計画を立てたこと、一八七二年にベアトリチェの彫像をつくったことは周知のところである)三つの円をなしている。『人種不平等論』は人類の歴史、すなわち黒人および黄色人の「烏合の衆」と戦うアーリア人種の冒険を辿る。『ペルシア人の歴史』はアーリア起源で最も高名な種族の勲功を物語る。そして最後に『オッターール・ジャール』はアーリア種族のなかでもとりわけ生氣ある一支族、スカンジナヴィア人の開花を描いており、ノルウェーの海賊の末裔がアーリア種族の美德を体現するのである」。Ibid., p. 49.

(9) *Essai sur l'inégalité des races humaines, Œuvres, Tome I, Bibliothèque de la Pléiade*, Gallimard, 1983, p. 1173. 以下 *Essai* と略記する。またゴビノーはこの第二版への序文において、『オッターール・ジャール』に結実する系図の完成は「私の関心の原因にして目的」であったとも述べている。

(10) *Essai*, p. 1152.

(11) 一八五五年一月八日づけトクヴィル宛ての手紙。Alexis de Tocqueville, *Correspondance d'Alexis de Tocqueville et d'Arthur de Gobineau, Œuvres complètes de Tocqueville, Tome IX*, Gallimard, 1959, p. 223.

(12) 寺田和夫『人種とは何か』(岩波新書、一九六七年)一六九頁。

(13) カッシーラー『国家の神話』宮田光雄訳(創文社、一九六〇年)三〇〇頁。

一 人種と文明

『人種不平等論』は全体で六部からなり、そのうち「予備的考察 社会的世界を支配する自然法則の定義・探究・説明」と題された第一部が理論的な根幹部分で、人種と文明の関係について原理的な説明が与えられる。そこで得られた「人種決定論」とも言うべき観点から、第二部以下において全文明史が辿られるという結構である。本節では、第一部を中心に検討していく。

そもそもゴビノーにとって初発の問題設定は、いかにして文明は没落するのかというものであった。「諸文明の崩壊は歴史上のあらゆる現象のうちで最も際立ったものであると同時に、最も目立たないものである。この不幸な出来事は精神を怯えさせるが、依然として何か非常に神秘的なもの、非常に壮大なものを持っているので、思想家は飽くことなくこれを考察し、研究し、その秘密を模索しているのである」⁽¹⁾。文明の形成・発展・成熟は確かに一つの驚きではあるが、「人類の知性の賜物」として説明がつかないではない。しかし歴史上に数多の社会が出現しては消滅し、あらゆる文明が例外なく衰退していくのはなぜなのか？ これこそ解明さるべき謎である。

こうした問いの立て方からは、ペシミスト・ゴビノーの精神的気質を看取することができるが、問題自体は古代ギリシア・ローマ以来、十八世紀の啓蒙哲学者に至るまで取り組まれてきたものであり、文明を崩壊に導く要因として、宗教的ファナティズム、奢侈、習俗の紊乱、信仰心の欠如、悪政などが考えられてきた。もっとも古代においては、

これら没落の諸原因を回避し、文明の永続化が目指されたのに対して、フィロゾフの思考法では、宗教とはファナティズムであり、法律とは専制であり、産業・商業とは奢侈・腐敗である、したがってこれらを破壊すべきだという、いわば革命的な性格が顕著になっており、議論の方向性は異なっていたが。

まずゴビノーは、このような没落原因に関する議論に逐一反論を加えるところから始める。ファナティズムが国家を滅ぼすと言うが、メキシコのアステック人などは宗教的熱狂のうえに帝国を築いていたではないか。古代のギリシア、ペルシア、ローマの奢侈と言っても上層階級に観察されただけで、それも今日の諸国家に比べれば高が知れているし、中世イタリアの例を見ても分かるように、豪華さを誇る国家が直ちに弱体ということにはならない。習俗の腐敗は忌むべきことだが、若い社会が常に健全な習俗を備えているわけでもなく、社会の衰退とともに必ず風俗が頹廃するわけでもない。事実、ローマは没落期に偉大な君主を出している。また信仰を保持したまま滅びる国もあるから、無宗教が国家を滅ぼすとは言えない。悪政についてはいくつかの種類があるが、そもそも人間というものは悪に慣れていくものだし、悪政も無秩序よりは遙かにましで、以前の体制に比べれば善政であることさえしばしばだから、いずれにせよ国家の滅亡にとって決定的ではない。こういった宗教的・道徳的・政治的要因は、ゴビノーに言わせれば、文明にとって外的な副次的要因にすぎないのである。

それでは本質的な原因とは何か？ それは社会の内部、つまり文明を形成し支えている人間における「退化」(degeneration)のうちに求められる。退化とは、異人種間の混血によって生じる生理学的現象を指す。「それゆえ私はこう考える。「退化した」という言葉がある民族に適用されるとき意味しなければならず、また意味していること

は、この民族は相次ぐ混血によって徐々に価値の変質を被り、その血管にはもう同じ血が流れていないので、いまではかつて保持していた固有の価値を持っていないということである⁽²⁾。文明の衰退は人種の混血によってもたらされる——これがゴビノーの解答であり、『人種不平等論』を貫く基本テーゼである。

人種を本質的駆動力とする文明史の構想は、ゴビノーの時代には決して突出したものではなかった。周知のように、十九世紀は文明の興亡する舞台としての歴史に対する関心が高まりを見せた「歴史の世紀」である。フランスだけを考えてみても、『ヨーロッパ文明史』で名高いギゾー (François Guizot, 1787-1874) を筆頭に、『フランス革命史』をものしたティエール (Louis Adolphe Thiers, 1797-1877) 、大著『フランス史』をはじめ数々の歴史書を世に送り出したミシュレ (Jules Michelet, 1798-1874) 、ミシュレの盟友でヘルダーの翻訳者でもあったキネ (Edgar Quinet, 1803-1875) などの名前が直ちに想起されるであろう。ゴビノーの文明史への関心が、このような知的コンテクストのなかで喚起されたことは記憶されてよい。歴史の発条を人種に定めようとする企図もゴビノーの独創ではなく、「フランス歴史学における階級闘争の父」(マルクス) と呼ばれたロマン派の歴史家オーギュスタン・ティエリ (Augustin Thierry, 1795-1856) や、あるいはサン＝シモン主義者のヴィクトル・クルテ・ド・リル (Victor Courtet de l'Isle, 1813-1867) ⁽³⁾ すでに生理学の知見を援用しながら人種を歴史の決定要因に組み入れていたのである。このような人種への注目は、ある時代的要請に促されたものと考えられる。宗教改革によるキリスト教共同体の紐帯の弛緩、十八世紀を通しての世俗化の進行、フランス革命によって加速された社会のアトム化といった、一口に言えば「近代化」の巨大なうねりのなかで、集団概念 (group idea) の真空状態が生じ、これを埋めるべく十九世紀が発見

したものこそ、階級であり、ネーションであり、そして人種であつたからだ。⁽⁴⁾したがって、社会主義、ナショナリズム、人種主義は、それぞれの流儀で「共同性」を回復させる試みであり、疎外状況への応答であつたと言える。

さて「文明の衰退は人種の混血によつてもたらされる」という命題は、人種間に価値の差異(＝不平等)があることを含意している。ゴビノーは、各人種の価値は本来のもので、混血以外のいかなる外的要因——政治的・法的・社会的制度、自然環境、キリスト教——によつても変化することはないと見なしているが、この点に関する説明を要約しておこう。

まず諸々の制度について。⁽⁵⁾「人種の不平等」はあらゆる制度に先立つ。制度が人種をつくるのではなく、人種が制度をつくる。人種の差異が生来のもので、永久不変であるという思想は非常に古くからあつて、カースト制であれ貴族制であれ、ほとんどの統治理論はこれに基づいていた。ところが混淆が進むにつれて、人間はすべて平等であるという幻想がいきわたるようになった。この立場から専制を批判する啓蒙主義者は、生まれによる特権や優越性を全否定するに至つた。彼らの合言葉は「人類みな兄弟！」である。しかし人類が同じ程度の知性や価値や影響力を持っているというのは「政治的原理」であり「科学の原理」ではない、とゴビノーは断定する。平等主義者は統治形態が国民に与える影響を声高に叫んでいるが、そもそも政治体制には二つの起源しかない。すなわち自分自身の本性に従つて生活している国民から自然に生じた政体か、征服民族によつて押し付けられた政体かである。前者の場合には、政治制度は民族の本能に一致しているので何の問題も起こらない。後者の場合、元来の民族精神に反する制度を定着させるのは極めて困難である。文明は簡単に移植できるものではないので、外来の制度を無理に押し付けても混乱を生

んで、結局は国を滅ぼすだけであろう。それゆえ何らかの制度が民族精神を変化させたり、「人種の不平等」をつくりだすことはない。

次に自然環境について⁽⁶⁾。民族は居住している環境からの影響で進歩したり停滞したりすることはない。たとえば四大文明の発祥地を見ても、古代ギリシアやローマ、あるいはパリも含めて近代に発展したヨーロッパの諸都市を見ても、不毛な土地、苛酷な気象条件、不便な地形といった自然環境の不利を克服して文明を築き上げたのであり、逆に恵まれた土地の住民がいつでも文明化できるわけではない。ある民族が文明化できるかどうか、できるとすればその文明がどのような性質を帯びるのかを決定するのは、モンテスキューの重視するような気候的要件ではなく、人種に内在的な価値や本能である。

最後にキリスト教について⁽⁷⁾。啓蒙哲学者のように、キリスト教の現世放棄の教義が社会の進歩を阻害したと非難するのは誤りである。キリスト教は習俗を柔和にし、愛によって人間関係を円滑にし、暴力を抑制したのだから、一定程度は文明化に貢献したことを認めるべきであろう。とはいえキリスト教を採用した民族がすべて文明化したわけではなく、やはり過大な評価は慎まねばならない。ゴビノーの見たところ、これまでの宗教と比べてキリスト教の新しい点は、それが特定の地域や民族を選ばない、全世界に開かれた普遍的な宗教（「カトリック」）であることだった。したがって文明が一定の領域性を伴った個別的な現象である限り、「仏教文明」や「ユダヤ文明」は存在しても、「キリスト教文明」なるものは成立しない。あまつさえキリスト教の主たる目的は人間の外面や物質的世界を変革することではなく、もっぱら信仰心という人間の内面を対象としていたのであり、個人の良心に関わるキリスト教は文明と

いう社会的・集団的現象とは次元を異にしている。だから結局のところ、人種の本来的な文明化能力がキリスト教によって影響を受けることはないのである。

こうしてゴビノーによれば、人種間における内在的価値の差異は、混血さえ起こらなければ永久に不変であり、文明化の能力を具えた優等人種とみずからは文明化できない劣等人種の間の深淵は、いかんともしがたいものである。

たとえば世界中の黒人種族の大多数がそうであるように、他集団と接触することなく完全に孤立したまま、部族(tribu)から民族(nation)へと発展を遂げられず、文明への第一歩すら踏み出せない未開状態の種族が存在する。

なぜ彼らはこのような状態に留まっているのか? 「動物と同じように、混淆に対して人間の感じる自然な嫌悪感に打ち克つ能力がないからである」⁽⁸⁾。その逆に、人類に普遍的な混血への嫌悪感、すなわち「孤立の精神」(esprit d'isolement)を克服しえた種族は、戦争による近隣種族の征服、被征服者の奴隷化、成員の階層化を経て、一部族からより大きな集合体へと脱皮する。多くの種族はここで歩みを止めるが、「いっそう想像力に富み、いっそうエネルギーに満ちた」種族は、ゆつくりと長い時間をかけて土地も人間も融合させ、征服者と被征服者の間の感情的軋轢を取り除き、やがて混血を起こして、一つの民族を形成するようになる。この段階にまで到達できる種族だけが文明化の能力を持っていると見なされるのだ。人類は「斥力」と「引力」の二つの法則に支配されており、前者に従って混血を忌避する種族は永遠の孤立状態から抜け出すことができず、後者の法則を受け入れた種族だけが文明を築くことができるのである。

すでに気づかれたように、ゴビノーにとって混血とは、一種のアンチノミーを孕んだアンビヴァレントな現象であ

る。なるほど異人種との接触を避けて血の純粹性を保っていれば、退化が起ることはない。「一つの民族は永遠に同じ民族的要素から構成されているかぎり、決して滅びることはないだろう」⁽⁹⁾。しかしそのような状態は、文明以前、ないし歴史以前の段階で停滯することに等しい。文明化への第一歩を踏み出し、歴史の齒車を回転させるには異人種間のコミュニケーションが不可欠になる。だが同時に、文明の担い手である人種のパースペクティブで捉えれば、混濁は人種における原初の純粹性を喪失させ、退化をもたらす要因にはかならない。そしてその文明は、いわば人種的に去勢されるのである。それゆえ混血は文明の薬にして毒である。ゴビノーのペシミスティックな歴史哲学においては、混血による文明化の果てに没落するか、混血を嫌って歴史以前の未開状態に留まるかというジレンマ——ツヴェタン・トドロフの表現を借りれば「死か、非一生 (non-vie) か」⁽¹⁰⁾の選択しか残されていないのである。

ここでゴビノーの文明観を確認しておくべきであろう。ゴビノーはギゾーの『ヨーロッパ文明史』を取り上げて、その文明概念があまりに政治的な傾きを持っていることを批判している。すなわち、ギゾーにとって文明とは、立憲体制や代議政体、あるいは政治的自由の有無といった、一国の政治的狀態にもっぱら関係しているが、その論理を突き詰めていくと、文明はイギリスにしか存在しないということになり、文明の概念としては狹隘で党派的なものになっている。これに対して、ヨーロッパ中心主義やフランス中華思想を免れた視点から、文明の相対性と世界の多元性を擁護しようとするゴビノーは、文明は政府の形態とは無関係だから、独裁制のもとでも、非ヨーロッパ世界においても、十分に発展する可能性があると主張し、文明が大西洋の一小島にしか花開かなかったと考えるのは、人類に

とって屈辱であろうと述べている。⁽¹¹⁾

ゴビノーは続いてフンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) の議論を吟味する。フンボルトは『カヴィ語研究序説』のなかで「文明」(Civilisation) を次のように定義している。「文明とは、外面的な諸制度やさまざまな慣習、および、それと関わりを持つ内面的な心の持ち方に関して、民族を教化^{フエルメンシュリッツフンク}して人間らしくすることを指す⁽¹²⁾」。この定義は、ゴビノーからすれば、ギゾーのそれとは逆にあまりに広すぎる。人々が人間らしく温和になれば文明化したと見なすなら、温和な野蛮人も文明の一員に数えなければならぬだろう。そこでフンボルトは、文明よりも高次の段階に「文化」(Kultur) を位置づけている。「文化とは、このように改善され高尚になった社会状態に対して、学問および芸術を付与することである⁽¹³⁾」。学問・芸術の尊重はしかし、粗野と見なされた様々な労働、耕作や手仕事をなおざりにしたり、軍事を疎んじたりする嫌いだらうか？ ゴビノーはこの段階には文弱の気味があることを指摘しているのである。さらにフンボルトは以下のように述べて、文明と文化の上位に「教養」(Bildung) を置いている。「しかし、我々の言語であるドイツ語で教養という語を用いるときは、何かより高いものであるとともに、どちらかといえば、内面的なものを同時に意味しているものである。すなわち、教養というものは、人間の精神的ならびに道義的な営みを認識し、感じ取るときに自ら生れてくる一定の気質^{ジネスアルト}性向であって、こういう内面の方向は、人間の物事の受け取り方ならびに性格に対して、非常に調和の取れた形で影響を及ぼしてゆくものである⁽¹⁴⁾」。ゴビノーに言わせれば、教養というのは個人の問題で、ある社会が文明化しているか否かとは別の事柄に属する。人々が温和ならば文明だという最初の定義では広すぎるけれども、このように教養まで要求するのでは狭すぎるのである。⁽¹⁵⁾

それではギゾーとフンボルトの定義を斥けたゴビノーは、文明をどう定義するのか？「私の視線が捉えようとするもの（……）それは大衆のなかで発展する、物質的であると同時に精神的でもある、力の総体なのである」⁽¹⁶⁾。ゴビノーによれば、すべての人種は「物質的」(matériel)と「精神的」(moral)の二種類の本能を具えており、それぞれの強さの度合いが人種の特性を規定する。前者は「男性的原理」(principe mâle)とも呼ばれ、これが支配的な人種では功利的な関心が発達している。物質生活を豊かにし、幸福を追求しようとする傾向が顕著で、黄色人種がこの典型になる。後者のほうは「女性的原理」(principe femelle)と呼ばれ、想像力に恵まれた人種をつくりだす。大部分の黒人種がここに分類され、精神生活に沈潜しがちで観念と事実を結びつけることができず、みずからの運命を切り開こうとする向上心に欠ける点が特徴である。ゴビノーはこのような物質的／精神的、男性的／女性的、活動的／思索的といった二つの本能の一方だけを称讃もしくは非難してはならないと注意している。このどちらも欠くことなく、しかも一方の本能が十分に具わっている人種だけが、高度な文化を形成し、文明の段階に達することができる⁽¹⁷⁾。

文明の担い手である人種が男性的か女性的かに応じて、当然その文明の性質も左右されるわけだが、ゴビノーはあらゆる文明に共通する一般的特徴があると言う。まず第一に、種々の欲望や感情を持つ群衆を一つにまとめることのできる体制^{レジーム}が整備されなければ、文明は生成しない。第二に、安定への欲求、すなわち自分たちを統合している原理を尊重し、社会的基盤の安定化を図ることが必要である。第三には暴力を避けること、第四には社会性というものが不可欠であり、知性の向上や物質的改善はこれなしに不可能である。以上のような特徴を要約してゴビノーは、文明とは「多くの人々が平和的に自分たちの欲求を満足させようと努力し、自分たちの知性と習俗を洗練させる、相対的

な安定の状態」⁽¹⁸⁾であると定義する。

「相対的な安定の状態」(un état de stabilité relative) という表現に留意すべきであろう。一方でオリエント世界のような過剰な安定は停滯を招いてしまうが、現代ヨーロッパのように過剰に流動的では永続的な発展は望めない。文明の持続のためには、人種の間にある程度の接触があり、適度に新しいものを吸収していく必要がある。トドロフの指摘するように、ゴビノーにとつての最善とは二項対立の間でバランスを保つことであり、すでに言及した「混血の両義性」もここから理解されなければならない。「混血は単純かつ純粋な状態よりも好ましいということなのだ。民族も文明も異種のもを吸収することに存する。安定性と流動性、男性的なものと女性的なものは同時に存在しなければならぬ。白人種それ自身は、知つてのとおり人類の最高の達成であるが、実際には一つの「中間」であり、黒人種(少しばかり「女性的」にすぎる)と黄色人種(「男性的」にすぎる)の行き過ぎを避けることに成功している。白人種は少なくとも概念上は一つの混血なのである」⁽¹⁹⁾。

世界の文明的先導者をひとり決め込んでいる現代ヨーロッパ文明は、ゴビノーに言わせれば、過去の諸文明や同時代の非ヨーロッパ文明より優れているわけではない。自分たちの文明が最高のもので、将来にわたって永続的に繁栄するというような思い込みは、現代人の傲慢にほかならない。「われわれの文明は海底火山の力で海上にせり出した一時的な小島に比較さるべきものである」⁽²⁰⁾。すべての文明は必ず滅びる。この運命は変更不可能で、ただ優れた知性に可能なのはそれを予見することだけである——こう腹を括っているゴビノーは、人類の「無限の進歩」とか「完成可能性」などというものをまったく信じていない。

「人間の知性というものは、つねに揺れ動いており、一点から別の一点へと駆けめぐるが、同時にどちらにも存在することはない。自分の持っている価値は高めるが、自分の手放すものについては忘れてしまう。決して抜け出せない循環のなかに閉じ込められていて、一方の領域を肥沃にするには、他方の領域を荒地にしておくしかない。人間の知性は、つねに先人に対して優っていると同時に劣っているのだ。それゆえ人類は決して自分自身を越えることはない。それゆえ人類は無限に完成可能なものではないのである」⁽²¹⁾。

あまつさえ現代世界はかつてのローマ帝国に匹敵するほど多くの異質な要素を抱え込んだ雑種文明である。確かにそれは多様な要素から成り立っているがゆえに、比較・分析の精神は発達を遂げることができたし、この文明がさらに多方向的に発展していく可能性もなくはない。そのことはしかし、必ずしも現代西洋文明の絶対的卓越を意味しない。たとえば政治的状况を見ると、イギリスのような同質性の高い国では安定が保たれているが、フランス、中央イタリア、ドイツでは人種的多様性ゆえに極めて流動的であり、「相対的安定」という文明の定義すら満たしていない状態である。こと統治の安定性に関しては、仏教やバラモン教の文明圏のほうに軍配をあげねばなるまい。また芸術の分野でも、現代ヨーロッパは、インドやエジプト、ギリシア、アメリカ、あるいは古代の民族が残した作品に比肩するものを持っていないし、習俗についても本質的に卑小で他文明に及ばない。このようにゴビノーにあっては、現代ヨーロッパ文明は完全に相対化されているのである。

それでは、先史から現代に至るまで様々な文明を築いてきた人類は、どのように発生し、いかなる分化の過程を

辿ったのだろうか？ 人類の起源が単一か複数かという起源論争は、十八世紀以降、植民地における非白色人種との接触や自然科学の発展に伴って激しさを増した。基本的に人種単一起源説は、起源において一つであった人種が長い年月をかけていろいろな変異を生じたと思なし、その変化の主要因を環境に求める立場であり、リンネやビュフォンによって理論的説明を与えられた。これに対して人種複数起源説は、もともと人種は相異なる祖先から発達してきたと主張し、ヴォルテールやケイムズ卿の唱えるところとなった。十九世紀前半にはパリでアカデミー論争にまで発展したこの問題は、人類はすべてアダムの子孫であるとする聖書の記述や奴隷制への態度とも関係するだけに、デリケートな問題であった。

さてゴビノーはこれらの二つの立場に検討を加えていくが、そこにキリスト教の教義との抵触を避けようとする意図が働いているために、歯切れの悪さは否めない。複数起源説を支持する理由は見出しがたく、ある種の気候的要因によって人種の多様性が生じたという立場をとっているが、⁽²²⁾自然条件の影響の過大視や恣意的な聖書解釈については単一起源論者に対して批判的である。総体的に見た場合、『人種不平等論』の論調はむしろ複数起源説に与すべきものと思われるが、⁽²³⁾いずれにしてもゴビノーの関心は、起源云々よりも現在における人種の差異、混血以外には廃棄できない差異の不変性に向けられていたことは確かである。

「こうして、人類の起源が単一か複数かについてどんな態度をとろうとも、いかなる外的な影響も相異なる種族を類似させ、同化させ、混同させることはできないだろうから、これらの種族は今日では互いに完全に切り離されているのである。

だから現在の諸人種は、一つだか複数だかの失われた最初の起源とはまったく別の支族であって、そのような起源は有史時代には全然知られておらず、われわれはその最も漠然とした特徴さえまったく思い描くことはできない。そしてこれらの人種は、成員の体格や体型、頭蓋骨の構造、体内の構造、体毛の性質、肌の色などによって、互いに異なっているが、彼らの主要な特徴は混血の結果による以外、混血の力による以外に、失われることはないのである⁽²⁴⁾」。

ゴビノーは最初の人種を「第一類型」——あるいは「アダミット」(Adamite)——と呼んで、山地ではなく平地に居住していただろうと推測しているが、彼らについては具体的に何も知りえないので議論の対象外に置いている。われわれが検証しうるのは、何らかの環境的要因によって、明瞭でオリジナルな差異が確定した「第二類型」からである。ここにはキュヴィエ (Georges Cuvier) の分類に従って白色人種、黒色人種、黄色人種の三つが属すとされ、白人にはコーカサス、セム、ヤペテの諸族、黒人にはハム族、黄色人にはアルタイ、モンゴル、フィン、タタールの諸族などがそれぞれ含まれると言う。これが人類の純粋な三要素であり、その基本的特徴はおよそ次のように整理される。

・黒色人種——全人種の最下位に位置する。獣性を刻印されており、知的発展は望めない。しかし単なる畜生ではなく、強力なエネルギーを秘めている。欲求と意志においては恐るべき強さを示し、様々な感覚に秀でており、特に味覚と嗅覚に関しては他の人種を凌駕している。が、まさにこの点こそ彼らの劣等性を表していて、彼らは食べる

ことだけを考え、どんなものでも底無しに食べるし、またどんな匂いにも満足する。それに加えて、気まぐれで感情の起伏が激しく、善悪の区別もつかない。さらに自他の生命に対して無関心で、意味もなく人を殺すこともあれば、苦難を前にして平気で自分の命を絶つほど臆病でもある。

・黄色人種——黒人とは正反対の特徴を示す。体力は弱く、無気力の傾向がある。黒人のような行き過ぎたところはない。欲求は弱く、意志は極端というよりも執拗、物質的享楽に対して静かな欲求を見せる。黒人とは違って食物は選んで食べる。何事につけ凡庸で、そこそこの理解力を持っており、実用性を愛し、規則を尊び、ある程度は自由の意識もある。狭義における実際的な人間である。夢想したり、理論を弄んだりせず、ほとんど発明もしないが、役に立つものは評価し取り入れる能力を持つ。穏やかに快適に生きていくことだけを願っている。黒人よりも優秀と言える。しかし自分たちで社会を創造し、それに活力や美しさを与えることはできない。

・白色人種——思慮を備えたエネルギー、あるいはエネルギーに満ちた知性を持つ。実用性の感覚があるが、黄色人種の場合よりも広く、高尚で、勇敢な、理想的な意味においてである。その忍耐力は障害を認識して、最後には取り除いてしまう。体力は強い。秩序への本能や自由への意欲も旺盛。中国人の甘んじている形式主義的な体制にも、黒人を抑制している傲慢な専制にも敵意を示す。生への愛着においても際立っている。残虐行為に及ぶこともあるが、そのことに意識的であるのが黒人とは違う。大事な生命を捨てるとすれば、それは何よりも名誉のためであり、この名誉という言葉とその意味する文明化の概念は、黄色人や黒人には未知のものである。白人は知性において非常に優れており、感覚の強さでは他の二人種に劣る。

事実上の最初の人種であるこの三人種が現在の諸人種の祖型になるわけだが、一見して分かるように、そこには白人を頂点とする確固たるヒエラルヒー、すなわち「不平等」の体系が存在している。美しさ、体力、知力のどれをとっても白人が最も優秀とされ、後に詳しく見るように、この卓越した人種だけが文明化の能力を備えており、歴史上の全文明の栄光は白人の活動に帰せられるのである。

ところで、原初において人種の有していた特徴の純粹さは、今日ではすでに失われてしまっている。「第二類型」の混淆から「第三類型」が生まれ、さらに混淆を重ねて「第四類型」が生まれる。その過程で人種本来の際立った特徴は薄められ、差異は中性化されていく。それはゴビノーにとって「不平等」のシステムの崩壊にはかならない。「小さなものは高められた。不幸にも、同時に大きなものも低められてしまった。これは何をもってしても償えない、埋め合わせのきかぬ、一つの災厄である」⁽²⁵⁾。

ここで混血という現象の持つ二面性が指摘されていることに再び注目しておこう。第一に、小さなものが高められるという側面。劣ったものに優秀な血が混じることで、その価値が高められるという、いわば混血のメリットである。ゴビノーによれば、世界の文明化という事業は白人だけがよく為しうるところだが、もし混血が起こらず「不平等」の体系が不変であったならば、黄色人と黒人は永久に未開状態に甘んぜざるをえなかっただろう。したがって混血とは、ある意味では文明化のための必須条件なのである。たとえば芸術や文学の開花は文明化の一つの指標となるが、後述するように、芸術的才能は白人種と黒人種の混淆によって初めて発現するとされている。⁽²⁶⁾しかし第二に、混血の現象は同時に高貴なものの切詰めでもあり、世界の平準化を推し進める動因にほかならない。

「それゆえ、混血が一定の限度内で人類の大多数には好ましく、人類を引き上げ、気高くするとしても、それはまさにこの人類そのものの犠牲のうえに成り立っているのである。というのも混血は、人類をその最も高貴な部分において、低下させ、衰弱させ、屈従させ、頭を落とすからである。無数の取るに足らぬ連中を凡庸な人間にでも改良してやるほうが、王家の血をひく人種を保護して、似たような変化の結果、その血が切れ切れにされ、貧しく、不純になり、恥ずべき要素に成り下がるよりはましだ、と信じたとしても、それでもなお、混血は止まないという不幸は残るだろう。つまり、偉大なものの犠牲のうえに今しがたつくられた凡庸な人間たちが、新しい凡庸な人間と結びつき、ますます墮落したこの結合からバベルの混乱にも似た混乱が生まれ、完璧な無能状態に至り、社会をどうにも取り返しのつかない無に帰せしめるのである」⁽²⁷⁾。

偉大さの矮小化による凡庸化の進行という認識自体は、民主主義のいっそうの拡大を背景に、これから半世紀もすれば登場するであろう群衆心理学や大衆社会論の専門家たちと軌を一にしていると言ってよい。たとえばル・ボン(Gustave Le Bon, 1841-1931)。貴族主義的な立場から世紀の転換期を眺めていたこの独学の心理学者は、ゴビノーと同じように民主主義と社会主義に対して激しい敵意を燃やし、とりわけラテン民族における群衆化の傾向を苦々しい思いで観察した。ル・ボンは、集団のなかに入り込んだ諸個人が、主体性も知性も個性も失って、単なる「自動人形」と化してしまう状況を目の当たりにして、「群衆は、いわば、智慧ではなく凡庸さを積みかさねるのだ」⁽²⁸⁾と慨嘆している。その訝はオルテガ(José Ortega y Gasset, 1883-1955)の言葉にも聞き取る⁽²⁹⁾ことができよう。「大衆とは《平均人》である。それゆえ、たんに量的だったもの——群衆——が、質的な特性をもったものになる。すなわち、

それは、質を共通にするものであり、社会の無宿者であり、他人から自分を区別するのではなく、共通の型をみずから繰り返す人間である⁽²⁹⁾」。

あらゆる次元で「差異」「距離」「個性」を消去し、平均化を推し進める運動——ゴビノーが「混血による人種の平等化」として捉えた現象を、今日では「大衆化」と呼んでいるのである。言ってみれば、大衆とは混血なのだ。かつてジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) は、大衆は「一つの新しい構成物」であり、「それは、メンバーの完全な個性から生れた構成物ではなく、各メンバーの性質のうち、他の人々と一致する部分、つまり、有機的進化において最低の、最も原始的な部分から生れた構成物なのである」と述べて、「万人の共有するものは、最も貧しい所有者の所有物であるほかはない」と喝破したが、大衆と同じように、混血によって生まれる「新しい構成物」も両親の血統の単なる平均値ではなく、各人種の本来的な「個性」の否定であり、「差異」の体系として存立する人種システムの破壊である。白人の独占状態にあった美、知力、体力が万人に共有された挙句、新たに生まれたのは、美しくとも体力はなく、体力はあるが知性に欠け、知性はあっても醜く虚弱な混血人種であり、一人の人間のうちに黒人の髪質とモンゴル人の顔つきが、あるいはゲルマン人の目とセム人の身長が同居するような「人種的無秩序の恐るべき光景」⁽³¹⁾が現出したのである。そしてこのような事態は、全人類の均質化を完了するまで止むことなく進行していく。「その身長、その顔つき、その体格は似通ったものであろう。彼らは体力も同じ程度なら、性向も似たような方向性、能力においても同じくらい⁽³²⁾の力量であらう。そしてもう一度言っておくが、この一般的な水準というのは不愉快このうえなく低いものであろう」。

戦争も植民も交易もひとしく混血を進行させ、無秩序を加速せしめるが、ゴビノーによればこの傾向が特に顕著なのは、地域的には港町や首都や植民地といった大量の人間が集まり交流する場所、階級的には「下層階級」(les basses classes) においてであると言う。苦渋のパリ生活で染み付いた都市嫌悪も宿痾のごとくだが、ここではゴビノーの人種思想における階級的性格を確認するために、この点に関して最も直截に語られている一節を引用してみよう。

「あらゆる社会は、その各々が一つの人種を表す三つの基本的な階級のうゑに立脚していることはすでに明らかであった。すなわち、勝利した人種に多かれ少なかれ似通った姿の貴族階級、偉大な人種に近い混血からなるブルジョワ階級、南部では黒人、北部ではフィン人という劣等人種に属するため隷属状態にあるか、少なくともかなり衰弱した人民階級である。

この根本的な概念は早くから至るところで混乱させられた。まもなく三つ以上の人種のカテゴリーが認められ、したがって三つをずっと上まわる社会的下位区分が認められるようになった。しかしながら、このような構成を打ち立てた精神はつねに生き続けた。それは今もなお生きている。それは決してみずからを否定しなかったし、今日でもかつてと同じくらい厳密に論理的であるように見える⁽³³⁾」。

これで「人種のヒエラルヒー」が「階級のヒエラルヒー」に直結していることは明らかだろう。三つの人種によって構成されたヒエラルヒーは、度重なる混血の結果すでに崩壊した。同じく階級のヒエラルヒーも、とりわけ大革命以降の階級闘争の歴史のなかで破綻を来した。かかる状況において重要なことは、根源的な差異を創設した精神、ニーチェ風に言えば「距離のパトス」(Pathos der Distanz) を堅持することしかない。こうゴビノーは訴えたいの

である。確かに『人種不平等論』の狙いの一つは、あらゆる事象を人種の函数として処理することにあつたが、現実には階級への関心が先行していたことを見逃してはならない。当時の貴族主義者におおむね共通したはずの、没落への不安、過去追慕の感情、平民階級に対する侮蔑といった階級的意識が、ゴビノーの場合には人種思想へと収斂していったのである。

このあたりの事情を理解するには、「二つのフランス」というこの国に古くからある考え方に触れておくのが便宜であらう。⁽³⁴⁾それは、フランス人と総称されているこの国民には、ゲルマン系の征服民族フランク人と被征服民族であるガリア・ローマ人の血統を引く二つの人種が存在するというものである。ルイ十四世の治世下では、国民の一体性を確保するべく二つの人種はもともと兄弟関係にあつたとする説が支持されたが、十八世紀に入り王権の確立と平民階級の擡頭によって挾撃された貴族階級は、その既得権益を擁護するための新たな根拠づけを必要とするようになった。なかでも、二つの人種を峻別したうえでゲルマン人のガリア征服という歴史上の事実を訴えて、征服民族の末裔たる貴族階級の支配を正当化したブーランヴィリエ伯 (Comte de Boulainvilliers, 1658-1722) の理論は、「二つのフランス」論の雛型でもあり、後のフランス人種思想に先鞭をつけたと目されている。「異民族間の戦争」(ギゾー)として表象されたフランス革命においては、このブーランヴィリエの論理を転倒させて、ガリア・ローマ人の末裔たる第三身分がその勝利に基づいて優越性を主張するという、シエイエスの『第三身分とは何か』のようなパンフレットも現れた。それ以降も十九世紀を通じて事あるごとに「二つの人種の争い」という図式が想起されたのであった。そして「実際、社会の位階づけ〔階級〕といわゆる人種間の位階づけは現代の理解ではきわめて対照的なものとされて

いるが、もともとは征服民族を被征服民族に対置させることで容易に混同されていたのである⁽³⁵⁾。

『人種不平等論』もこの「二つのフランス」の延長線上に現れた貴族擁護論と見ることができる。ルース・ベネディクトにならって「ゴビノーはフランスびいきでも、ドイツびいきでもなく(……)貴族びいきであったのである⁽³⁶⁾」と評価してもよい。ただ「古いフランスには三つの階級があった。新しいフランスには、もう二つしかない。民衆とブルジョワジーである⁽³⁷⁾」とミシュレが『民衆』(一八四六年)で注記したように、ゴビノーが自己を重ね合わせた貴族階級なるものは、もはや現実には一つの社会的勢力としての実体を備えていなかったことに留意しなければならない。この意味において、ゴビノーは「ブーランヴィリエの時期おくれの後継者⁽³⁸⁾」であるというハンナ・アレントの判断も首肯されるのである。

ゴビノーにおける人種と文明の関係については、以上の説明でその大要は明らかになったと思われる。次にわれわれは、『人種不平等論』第二部以下でゴビノーの叙述する文明史の流れを追跡しなければならない。人類史上、偉大な文明の出現はすべて白人種のイニシアチヴによってのみ可能であったと断定するゴビノーは、具体的に十の文明を挙げている⁽³⁹⁾。①インド文明、②エジプト文明、③アッシリア文明、④ギリシア文明、⑤中国文明、⑥古代ローマ文明、⑦ゲルマン民族の文明、そしてアメリカ大陸のものとして、⑧アレガン人、⑨メキシコ人、⑩ペルー人の諸文明。最初の七つは古代世界のもので、そのうちアッシリアを除く六つはアーリア人種による文明であり、またアッシリア文明にしてもイラン・ルネサンスはアーリア人種に負っている。いずれにせよ、黒人や黄色人によって創始された文明

は存在しない。これらの文明の具体的特徴と人種的要因に適宜言及しながら、ゴビノーの歴史観を検討するのが次節からの課題である。

- (1) *Essai*, p. 141.
- (2) *Essai*, p. 162.
- (3) ベルナル・アンリ・レヴィは、世界史を神の摂理というような超越的規則からではなく、内在的な原理の展開として把握しようとする企図の新しさについて指摘し、ゴビノーにおける「人種」は、マルクスにおける「弁証法」、コントにおける「実証性」と対応するものであると述べている。『フランス・イデオロギー』内田樹訳（国文社、一九八九年）一〇七一―一〇八頁。これはこれで正しいけれども、社会変動の原因が——ボッシュエの主張するとき「神の意志」ではなく——社会自体の内部にあることは、すでに『ローマ人盛衰原因論』においてモンテスキューが検証していたところであるし、歴史の原動力を人種に探ったのもゴビノーが最初ではなく、ティエリやクルテのような前駆者がいたことを見過ごしてはならない。そのことがしばしば人種主義思想史におけるゴビノーの「過大評価」につながっているからである。特にクルテについては、ポリアコフの次のような指摘がある。「クルテの独創的な考えのひとつは、人間の歴史は人種の間の闘争——「物理的な」——によるばかりでなく、もっと内的な仕方で、血の混合の具合によって、つまり「化学的に」も決定されるというものであった。彼はこの考えを科学的な仕方で表現した最初の人であろう。これはゴビノーを通して近代の人種主義のドグマになってゆくのである」。ポリアコフ、前掲書、三〇五頁。
- (4) Cf. Michael D. Biddiss, *Father of Racist Ideology: The Social and Political Thought of Count Gobineau*, Weidenfeld and Nicolson, 1970, pp. 103-104.
- (5) *Essai*, Livre I, chapitre V.
- (6) *Essai*, Livre I, chapitre VI.
- (7) *Essai*, Livre I, chapitre VII.

- (8) *Essai*, p. 165.
- (9) *Essai*, p. 170.
- (10) Tzvetan Todorov, *Nous et les autres : La réflexion française sur la diversité humaine*, Seuil, 1989, p. 162.
- (11) *Essai*, pp. 211-216.
- (12) ヴィルヘルム・フォン・フンボルト『言語と精神 カヴィ語研究序説』亀山健吉訳(法政大学出版局、一九八四年)四五頁。
- (13) 同書、同頁。
- (14) 同書、四五―四六頁。
- (15) *Essai*, pp. 216-218.
- (16) *Essai*, p. 218.
- (17) 文明を築きえた人種のうち、男性的な人種の筆頭に挙げられるのは中国人であり、ローマ人やゲルマン人もここに分類される。女性的な人種はインド人を代表とし、エジプト人、アッシリア人がこれに続く。ヨーロッパにおいては、ゲルマン人のもたらした男性的な功利的精神が、北部ではケルト人とスラヴ人の影響によって強められ、南部では女性的要素によって薄められたとされるが、大局的に眺めれば、オリエント文明では女性原理が、ヨーロッパ文明では男性原理が支配的であるとゴビノーは見ている(ただし次節で説明されるように、アジアでも中国文明は物質的有用性に基礎をおく文明である)。

このような人種の二元論的分類は、ゴビノー以前にドイツの学者によって一般化されていた。たとえば男性的／女性的、能動的／受動的の区別は、ヴォルフガング・メンツェル(Wolfgang Menzel, 1799-1873)やグスタフ・クレム(Gustav Klemm, 1802-1867)によって導入された。また昼の人種(白人)／夜の人種(黒人)という区別をしたカール・グスタフ・カールス(Carl Gustav Carus, 1789-1869)の著した『様々な人種における精神的発展の能力の不平等について』(*Über ungleiche Befähigung der verschiedenen Menschheitsstämme für höhere geistige Entwicklung*, 1849)や、ゴビノーの著書の表題にも影響を与えている。

- (18) *Essai*, pp. 224-225. 強調は原文。
- (19) Todorov, *op. cit.*, p. 157.
- (20) *Essai*, p. 236.
- (21) *Essai*, p. 301.
- (22) これはもちろん、自然環境の人種に与える影響を否定したゴビノーの主張と矛盾するが、この種の矛盾は本書のなかに散見される。
- (23) ポリアコフは「結局、彼は、理論においては人類単一起源論者であるが、実際上は複数起源論者であったと言える」と述べている。ポリアコフ、前掲書、三二三頁。またゴビノーは人種と言語の関係についても、あらゆる言語が同一の原理のうえに形成されたと考える文献学者が単一起源論者と同様の過ちを犯していることを指摘し、「諸言語のヒエラルヒーは諸人種のヒエラルヒーに厳密に対応している」(*Essai*, p. 339) と結論づけている。
- (24) *Essai*, p. 268.
- (25) *Essai*, p. 343. 『人種不平等論』における立論は、もっぱら生物学的・生理学的カテゴリーに依拠しているが、「混血による諸人種の平均化」というテーゼをより一般的な社会的文脈に定位して言い直せば、トクヴィルの次のような表現になるだろう。「十二世紀以来フランスに五十年毎に起っていることが吟味されるならば、これらの五十年期の各々の末端には、社会状態に二重の革命が必ず起っていることが認められるのである。この二重の革命とは、貴族が社会的地位で低落し、平民の地位が高まっていることである。一方は低下し、他方は上昇している。半世紀ごとに貴族と平民とは接近し、まもなく接触しあうようになっていく」。トクヴィル『アメリカの民主政治(上)』井伊玄太郎訳(講談社学術文庫、一九八七年)二六頁。
- (26) ゴビノーは、黄色人と黒人との混血の場合も両親より知的な子供が生まれ、黄色人と白人との混血からも純粋なフィン人や黒人より優秀な血統が生じると言う。*Essai*, p. 343.
- (27) *Essai*, pp. 344-345.

- (28) ギュスターヴ・ル・ボン『群衆心理』櫻井成夫訳(講談社学術文庫、一九九三年)三三頁。
- (29) オルテガ『大衆の反逆』寺田和夫訳(高橋徹編『世界の名著 マンハイム・オルテガ』所収、中央公論社、一九七九年)三八九頁。
- (30) ジンメル『社会学の根本問題』清水幾太郎訳(岩波文庫、一九七九年)五六、六一頁。
- (31) *Essai*, p. 284.
- (32) *Essai*, p. 1164.
- (33) *Essai*, p. 1045.
- (34) 「二つのフランス」については、ポリアコフ、前掲書、二二―四六頁、参照。
- (35) 同書、二二頁。
- (36) ルース・ベネディクト『人種主義 その批判的考察』筒井清忠・寺岡伸悟・筒井清輝訳(名古屋大学出版会、一九九七年)一四二頁。
- (37) ミシュレ『民衆』大野一道訳(みすず書房、一九七七年)一二〇頁。
- (38) ハナ・アーレント『全体主義の起原 2 帝国主義』大島通義・大島かおり訳(みすず書房、一九七二年)八一頁。
- (39) *Essai*, p. 347.

二 歴史とデカダンス

ゴビノーの「人種決定論」の立場を要約しておこう。各文明の特質はその担い手である人種の有する性質によって決定されるが、一つの人種だけで文明を立ち上げることはできない。それには異人種間の接触・混雑が必要である。だが同時に、混血は各人種の性質を内側から変質させ、そのオリジナルな差異を希釈化してしまう。こうして中性化

した人種に支えられた文明は、持続するエネルギーを失って、やがては停滞から衰退へと至らざるをえない。この必然的なプロセスは、人種を流れる血液中の配合から計算・予測可能であり、科学的な一般法則に還元することができ——。このような考え方に立って、ゴビノーは様々な文明が興隆しては衰滅する舞台として世界史の流れを描いていく。⁽¹⁾

ゴビノーは人類の誕生をおよそ紀元前五千年と推定しているが、その光景は、アフリカを本拠地として南方アジアまで支配権を握っていた野蛮な黒人と、アメリカ大陸から両大洋を越えてヨーロッパ・アジアに広がる黄色人の織り成すカオスであった。そこに初めて曙光が射し込むのは、選ばれた「エリート種族」(famille d'élite)たる白人種の登場のときである。ゴビノーによれば、白人種にはセム、ハム、ヤペテ(後のアーリア人)の支族が属し、彼らは数でこそ劣勢に立つものの、知力・体力において他人種の追隨を許さず、衣食住にわたって豊かさを享受していた。彼らの行動原理は「比類なき名誉心」であり、文明化に必須の「社会性」(sociabilité)を具え、さらに有史時代の遙か以前に、文明の主要素である「宗教」と「歴史」をも知っていた。戦闘に関しても高度な技術を有する白人たちは、北方アジアの高原から移動を開始すると、行路に立ち現れる他人種を次々と征服しながら、世界中に拡散していくだろう。ゴビノーにとって黒人と黄色人、あるいはそれらの混血人種は、歴史における「残骸」(débris)ないし「屑」(détritus)であり、白人だけが歴史的な人種である。「歴史はひとえに白人種族の接触から湧き出る」⁽²⁾のであって、白人とともに歴史は濫觴を迎えるのである。

しかし先述のとおり、征服↓融合↓文明化という過程の背後では、白人ハム族と黒人との間に最初にして決定的な混血が生じ、セム族も同様の混血を起こして、白人全体に黒人化が進行している事実を直ちに指摘しなければならない。白人に強いられた身体的・精神的・宗教的・言語的な変質は、近代の諸国民にもその痕跡を残すほど根本的で、文明の各方面に暗い影を投げかける。健全で素朴な原初の信仰は、黒人特有の怪物的イメージを伴った神秘や迷信、偶像崇拜へと墮落する(ゴビノーはこのプロセスを「美的変容」として語っている)。都市の形成と商業の発展は、単純で牧歌的な生活スタイルに代えて、豪華と奢侈を求めるメンタリティを醸成する。人身御供や売春、多重婚といった風俗の紊乱も表面化する。そして政治体制について言えば、個人の権利を否定する絶対的・専制的な統治が顕著になっていくが、これも黒人の性格を反映したものにほかならない。

「このような苛酷な機構を支配した靈感を分析することを忘れないでおこう。それが粗暴で醜悪なものを持っていた限り、その源は明らかに黒人的性質にあった。黒人的性質は絶対的なものを好み、容易に奴隷となり、進んで抽象的観念に群がるが、その理解をではなく、恐怖し服従することを求める。それとは逆に、見紛うことなき、もっと気高い性質を具えた諸要素のなかに、王権と祭司と武装せる貴族の間で均衡を保とうとするこの試みのなかに、規則と合法性に対するこの愛のなかに、白人種の諸民族においてはどこでも確認される、非常にはっきりとした本能が見出されるのである⁽³⁾」。

このように黒人的要素の白人への滲透は、物質的享楽への耽溺、抜きがたい迷信、道德的頹廢、統治の残虐性といった数々のマイナス効果を誘発するが、ほとんど唯一と言ってもいい混血の果実として、ゴビノーは芸術の芽生え

を挙げている。芸術の原動力は黒人の血のなかに、その旺盛な想像力のうちに宿っているのであり、それが最初に顕在化したのは、ニネヴェを中心とするアッシリア文明とメンフィスを中心とするエジプト文明においてである。どちらも文明の伝播に指導的役割を果たし、アッシリアの場合はティルス、カルタゴ、ヒムヤルに、エジプトの場合はアフリカ内地へと文明を波及させていった。二つの文明に共通するのは、理性に対して想像力が、精神主義に対して感覺的欲望が優位に立つ点であり、このような紛れもない黒人的性質ゆえに、詩や彫刻、絵画などの芸術分野で注目し値する仕事を残すことができたのである。「したがって、諸芸術の湧き出た源泉は文明をもたらず本能とは無縁であるという、このまったく厳密な結論が得られる。それは黒人の血のなかに隠されている⁽⁴⁾」。

しかしながら、黒人はおよそ知性というものを持ち合わせておらず、芸術を一つの文化に昇華させるだけの能力はない。アッシリアやエジプトでも芸術の黄金時代は短く、その強すぎる黒人原理が「醜悪なものの崇拜」というかたちで地金を現すと、頹廢の一途を辿るほかはなかったのである。ゴビノーに言わせれば、芸術の十全な開花には、やはり白人との結合が不可欠なのだ。黒人Ⅱ感覺性Ⅱ女性的原理と白人Ⅱ知性Ⅱ男性的原理の幸福な結婚によって初めて——文明の持続が混血の絶妙なバランスのうえに成り立っているのと同じように——真の芸術的創造は可能となるのである（後述するように、その実現にはギリシア文明の成熟を待たねばならない）。

知性とエネルギーに秀でた白人には、黒人に見られる獸的なまでの強烈な感覺的・官能的欲求が欠如しており、それゆえ芸術的才能には恵まれなかった。けれども逆に言えば、想像力と芸術性の欠落は、一時的な情動に左右されない崇高な道徳と、現実感覚に裏づけられた高度の政治的能力によって補われているということでもある。白人原理の

本質は「法を組織、整備、考案し、この法を用いて統治したこと、一口に言えば、理性として振舞ったこと」⁽⁵⁾に存する。このような白人／黒人の対立に基づく政治／芸術、あるいは道德／芸術の対立(反比例)は、ルネサンスにおいていっそう際立ったかたちで現れるであろう。

さて一方、白人種のなかでも最上位に位置し、「アーリア人」(Arian)の名を与えられるヤペテの子孫は、ハムやセムとは違って純血を保ち、身体的・精神的に最も優れた資質を持つものとゴビノーは規定した⁽⁶⁾。その身体的特徴は、金髪、碧眼、広い額、高い鼻、白い肌、長い手足といった、美の理念型を具現化した姿で描かれるが、この身体上の美しさは精神的な卓越性と対応している。ゴビノーによれば、「無尽蔵の活気とエネルギー」を持つアーリア人にとって戦闘は常態であり、「それゆえ美德とは戦士のヒロイズムであり、何を差し置いても、善良さとは勇敢さであった」⁽⁷⁾(そしてこのような戦士の勇敢さはルネサンス期のイタリア詩にも見出されると言う)。このような心身両面にわたる充実によってのみ、真の偉業は達成され、文明は賦活され、歴史は牽引されるのだ。

「人類の歴史は一枚の広大な布に似ている。(……)われわれの人種のうち二つの劣等種である黒人種と黄色人種は、綿や羊毛というごつごつした生地であり、白人種のなかでも二流の諸種族がそこにみずからの絹を混ぜて柔らかにする。一方、アーリア人集団は、高貴なる世代を通じてもっと細い金糸・銀糸を張り巡らせ、その表面に目も眩むばかりの傑作、金銀のアラベスクを敷き詰めるのである」⁽⁸⁾。

ゴビノーは原始アーリア社会の統治形態について、「アーリア人は部族ないし小集団に分かれて大きな村落に集住し、彼らの先頭に首長を戴いていたが、その極めて制限された権力は、黒人あるいは黄色人の諸民族における支配者

が行使する絶対的権力とは、何一つ共通するものを持たなかった⁽⁹⁾」と述べている。ここには、無制限の権力の集中による恣意的な専制を非白人的心性の所産として斥け、ある種の個人主義的封建制を理想視するゴビノーの、ノスタルジックな貴族主義の一面が顔を見せている。

未来に向けて目指すべき社会像を提示することのなかったゴビノーだが、アーリア人の流入によって起こった、バラモン教支配下のインドに一つの理想を見ていたのは疑いない。周囲を黒人種に取り囲まれた白色アーリア人は、すでに混血の始まっていることを憂慮して、「至上権を白人種に保持しようとする欲求に導かれて、知性の向上の程度に応じて序列化された社会状態を考案した⁽¹⁰⁾」。これがいわゆるカースト制である。血の純粋性が個人の内在的価値と直結する社会システムであり、アーリアの血が最も濃く聖職に携わる第一階級バラモンを頂点に、王族や武士の属するクシャトリア、農業や商業に従事するバイシャ、不純な血を引く原住民の構成する奴隷階級スードラまで、四つの階級が厳しく区別されている。またカーストは世襲されるので、インド社会の安定性・永続性の保持に本質的な役割を果たす。世界のリーダーを自任しながら、蹈躡を踏んでばかりいるヨーロッパの頼りなげで哀れな姿は、四八年の記憶もさめやらぬゴビノーに、このカースト制ないしバラモン教の秩序維持機能——すなわち混血抑止機能——を羨望させずにはいない。「もう一度言うが、自分たちの信仰の不安定さゆえに、北海の波打ち際の移ろいゆく砂丘よろしく、絶えずその体制と方針を変えることを余儀なくされている西洋諸国にとって、何という教訓であろうか!⁽¹¹⁾」

インドだけではない。中国もまた高度の安定性を誇る文明である。⁽¹²⁾ここでもゴビノーは、インドから入植したアーリア系人種が、原住民族である大量の黄色人を文明化したと理解する。この中国社会においてインドのカースト制と

対応するのは家父長制システムである。征服者たるアーリア人の権力は絶大で、理論上、皇帝は全権を手中にしているが、実際にはその権力は民衆や官僚によって抑制されており、支配者としても、不用意な行動は叛乱を助長するだけで、遵法精神を行き渡らせるほうが得策であることを心得ている。ヨーロッパ以上に発達した行政機構と警察組織も秩序維持に貢献しているし(そのぶん戦争と外交の分野はおざなりになっているが)、そして何より中国では伝統こそが社会規範の基軸にあつて、社会の確固たる安定性を保障している。「伝統は全能である。皇帝においては、先祖の従つた慣習からほんの少しでも踏み外すと、それはすでに専制なのである。要するに、天子は何をしてもよい。すでに知られていること、是認されていること以外は一切したがないなら⁽¹³⁾ば」。

しかしながら、白人種を中心に構成されたインドと中国の安定した社会体制も、ゴビノーを十分に満足させるものではなかった。ゴビノーは、もともとカースト制が一つの擬制に基づくシステムであり、バラモンでさえすでに無垢なアーリア人ではなかったと明言している。「その名声においては同時代の他の白人部族を凌駕していたが、彼らも原初のタイプには劣り、かつてのエネルギーはもはや持っていなかった⁽¹⁴⁾」。それでも仏教⁽¹⁵⁾やイスラム教からの挑戦を斥けつつ、長い間インド社会の指導原理たり続けてきたバラモン教だが、有色人種との混淆によるエリートの地盤沈下によって、今日の頹廢ぶりは覆うべくもない。このような状況下ではイギリスのインド支配もやむなしとゴビノーは見た。「いずれにせよ、この頹廢した人種の墮落した性質では、西ヨーロッパからやって来た白人の諸国民の優勢な力を前に太刀打ちできないだろう⁽¹⁶⁾」。そしてかりにイギリスの支配がいつか終わることがあるとすれば、そのときにはバラモン教が再び秩序構成原理になるだろうと予測したが、歴史を墮落への不可逆的過程と見なすペシミストに

とって、インドが旧態に復しえないことは明らかである。「しかしながら、私は告白するが、その民族的混乱はより複雑化するだろうし、また原初の文明が持っていた莊嚴なる一体性が蘇ることはないだろう」⁽¹⁷⁾。

一方、黄色人種を基盤とした中国文明は、インドで知性の創造的役割が重視されたのとは対照的に、物質主義ないし功利主義の傾向が著しく、こと物質面に関しては現代ヨーロッパの及ばぬ達成をも成し遂げたが、反面、美しさや品位にかけては鈍感で、宗教や礼儀は形式的・外面的なものに留まり、哲学や科学、とりわけ芸術においては見るべきものを残さなかった。統治においては、黄色人との混血が進んだ結果、権力の一極集中を忌避するアーリア的精神を反映した封建的システム——階層序列化された支配体制、小国の群雄割拠、諸個人の威嚴と独立性——は存在理由を失ってしまった。そのような中央集権化の過程を、ゴビノーは同時代のフランスに重ね合わせている。「革新的な精神の持ち主が、古来の領土的区分の破壊を必要不可欠であると考えたとき、一七八九年にわれわれの国で生じたことと、まったく類似した出来事が起こったのである」⁽¹⁸⁾。そしてゴビノーは、外国勢力の排除と同一民族の支配によって保たれてきた中国の「同質性」と「安定」も、黄色人の影響力が増すにつれて、「停滞」と「無氣力」の氣配が濃厚になると評価している。

繰り返し言えば、ゴビノーにとって歴史は、有色人種に対して圧倒的優位にあるいくつかの白人種が互いに接触し合うことよってのみ前進するのであった。したがって、対立・闘争・運動の契機を欠いた、閉鎖的で画一的な文明はやがて停滞から衰退へと向かわざるをえないのである。いまやゴビノーは、歴史発展の条件は西洋世界にだけ整っ

ており、世界の中心は、東はバビロンから西はロンドンの間、北はストックホルムから南はテーベの間で移動してきたのだと断定する。「最も多くの運動、諸事実の最も驚くべき多様性、最も名高い衝突、その絶大な影響力によって最も興味を引くもの、それらはそこに集中している。それに対して中国とインドでは、かなりの動きが生じたが、世界にはほとんど知られていないので、若干の徴候に目ざとい博学が多大の努力を払って、その痕跡を発見するだけなのである」⁽¹⁹⁾。このように世界史を西洋史と同一視する歴史観は、「自由」と「理性」の歴史は古代ギリシアに至って初めて本格的に始動すると考えたヘーゲルの歴史哲学の影響圏にあると言ってよい。⁽²⁰⁾ 東洋世界を真の歴史の露払い役と見なしたヘーゲルと同様に、ゴビノーもアメリカやアフリカ、アジアの大部分を歴史の「外部」へと追いやっているのである。

西洋の歴史家・哲学者にとって精神的故郷とも言うべき古代ギリシアは、ゴビノーによれば、アーリア的要素とセム的要素を中心に構成されており、この結合がギリシアの歴史的役割を決定している。「ギリシアの栄光はセム人の血と結合したアーリア人集団の業績であった。他方、この国の大きな対外的優越は少しかりモンゴル化した北部の住民の活動から生じた」⁽²¹⁾。ゴビノーは、紀元前十六世紀からの約八百年間をギリシアの英雄時代と見なし、アーリア人社会に共通する穏健な王政が敷かれていたと言う。それは「個人の自由」を基底に置き、家長の権威や法律、伝統、宗教などによって権力の制限された、アーリア・ギリシア人 (Arians-Hellènes, Arians-Grecs) の支配体制である。

彼らの行動原理は名誉・栄光・独立であり、「彼らは単に、自由人にして戦士たるアーリア人としてではなく、数多の戦士、自由人、アーリア人のなかにあつて、エリートたる個人として見なされ、評価され、尊ばれることを望んだ。

広く行き渡ったこのような野望は、各人に多大な努力を強いるものだったが、提示された理想を達成するには、できる限りアーリア的であることしか方法がなかったから、家系の純粋性が極めて重視された⁽²²⁾。白人種の血統の純粋性は封建的ヒエラルヒーによって担保され、インドやエジプトのカーストと同じように、エリートと非ギリシア人（奴隷やバルバロイ）との混淆抑止に機能したのである。「こうして自分の家では主人であり、公的空間においては自由人であり、真の封建的主君であるアーリア＝ギリシア人は、周囲の者、子供、奴隷、ブルジョワを留保なしに支配していた」⁽²³⁾。

しかしアジアからの移民の流入は人種間のバランスを崩し、アーリア精神は後景に退き、代わってセム的精神が前面に現れた。リベラルな王政は倒れ、短期間の貴族政を経て、共和政体あるいは民主政体が出現した。ここで重要なのは、これに伴って古代ギリシアにおいて初めて「祖国」(patrie) という観念が生まれたという指摘である。

「それゆえギリシアにおいて、祖国という虚構の人格をつくりだすことが考えられたのである。市民は、およそ人が思いつく限りの最も神聖なもの、最も恐るべきものによって、法律、先入見、世論の威信によって、彼らの嗜好、思想、慣習から、最も親密な関係、最も自然な情愛に至るまでを、この抽象観念に捧げるように命じられた。そしてこの絶えず強いられる犠牲も、この同じ祖国があなたがたにそれを要求していると見なされるや否や、合図一つで、つぶやき一つ漏らすことも許されず、自分たちの尊厳も財産も生命も差し出さねばならぬというもう一つの義務からすれば、ごく瑣末なものにすぎなかったのである」⁽²⁴⁾。

先述のとおり、ゴビノーは国家を絶対化する傾向を黒人的性質の発現として捉え、白人の制限された権力に基づく

合法的統治と対置していたが、雜種化によって共通の王を戴くことが難しくなったギリシアにおいて、政治的統合のための新しい手段として發明された「祖国」という抽象的觀念は、黒人的な——すなわち非理性的で醜惡な——統治形態の極限を示していると言えよう。ゴビノーは「祖国」という概念をカナンの地に由来するものと見なして、「カナン的醜怪」(monstruosité chanaënne)と呼んでいる。このような国家への嫌惡は、ゴビノーの人種理論をナシヨナリズムと直結させるという誤解、あるいはそれを全体主義の理論的基礎づけに援用しようとするナチス・ドイツ的な歪曲を正すためにも、十分に強調されなければならない。

市民生活のあらゆる領域から個人の内面にまで入り込んで忠誠心を調達する、いわば「想像の共同体」として国家を表象するゴビノーは、市民が国家への服従の見返りに得るものと言え、アテネ人、スパルタ人、テーベ人……といったアイデンティティを手に入れたり、一人の人間に服従していないことになりそめの自由を感じ、外国から強要された法律に縛られていないことを誇ったりするくらいのものだと揶揄している。けれども「祖国」は幻想の産物にすぎないと同時に、最終的には生殺与奪の権を独占しているという事実も忘れてはならない。端的に言えば、それは「専制」(tyrannie)なのである。そして「フィクションのために行使される専制ほど悪しき専制はない⁽²⁵⁾」。実体のない「祖国」なる概念は、アーリア系勢力が衰退して人種的に脆弱になった時代に、大きな政治的影響力を獲得し、凶暴性を發揮する。このときゴビノーの念頭にあったのが、劣等階級たるガリア・ローマ人の復活としてのフランス革命であったことは想像に難くない。「われわれの封建時代には、祖国なる語はほとんど使われなかった。それはガリア・ローマ人の階層が力を取り戻し、政治において一つの役割を果たしたとき、真にわれわれのもとに回帰してきた

のである。愛国心 (patriotisme) が再び一個の美德であり始めたのは、彼らの勝利とともになのである⁽²⁶⁾。

自分の生といかなる具体的な関係があるのかも定かでない「祖国」が、モラルの基軸として生を律するパトリオティズム、あるいは抽象的な国家が各人の差異や異質性を虚構の一体性のもとに回収し、ひとしなみに絶対的献身を要求するナショナリズム。——それはいかなる意味においてもゴビノーの認めるところではない。「貴族ゴビノーにとって、それは諸国民内の社会的差異という第一義性の否認であった。人種主義者ゴビノーにとって、それは国家を超えたエリート⁽²⁷⁾の価値の否定であった。社会秩序の擁護者ゴビノーにとって、それは社会に混乱を助長する手段であった」。「祖国」の名において個人の内面を浸蝕し、道徳的荒廃を引き起こしていく古代ギリシアの「絶対的愛国主義」の時代にあつて、唯一の例外者はソクラテスであつたとゴビノーは指摘している。ソクラテスが政治的利害から独立した徳を認識し、市民生活とは別のところに個人の内的領域を確保しようとしたことを高く評価するのである。しかし「祖国」が彼を許容せず、絶対主義化の流れがギリシア全土を席捲していったことは言うまでもない。

このようにギリシアの政治社会体制に批判の手を緩めないゴビノーは、ギリシアの文化・芸術の開花に称讃を惜しまないゴビノーでもあつた。もとよりギリシアの芸術的達成も人種的見地から説明されている。アッシリアのような黒人的な行き過ぎによく抵抗し、奇怪で子供じみた所業に陥ることを免れたギリシア人にして初めて、セムの血とアーリアの血の微妙なバランスのうえに、類稀な芸術感覚の完全さを実現しえたと言うのである。ゴビノーによれば、ギリシアにおける文芸活動は前七世紀頃に始まり、アジア的要素が優勢になるに及んで前四世紀末には終息を迎えたが、そのオリジナリティが存分に発揮されたベル・エポックは、パルテノン神殿建造の指揮をとったフェイディアス

とその一派が活躍した前四二〇年頃から、前三三二年のアリストテレスの死までの約百年間にすぎない。「それゆえ良き時代はほんの束の間にすぎず、国民の血を構成する諸原理の間でバランスが完璧であった短期間に挿入されたのである。ひとたび時が過ぎれば、もはや創造的な潜在力はなく、二度と戻らぬ過去の模倣、しばしば巧みだがいつも卑屈な模倣があるばかりだ」⁽²⁸⁾。もちろんゴビノーは、これ以前にホメロスに代表される叙事詩の黄金期があったことも忘れていない。ギリシア精神の叙事詩的段階は、セムの靈感によってもたらされる抒情詩の時代に先立つアーリア的靈感の時代であり、ヴェーダ、ラーマヤナ、マハーバータ、サガ、シャー・ナーメ、武勲詩などを生み出したのと同じアーリア的精神の所産であるとゴビノーは見なしている。そしてこのようなアテネの芸術的黄金期やホメロス時代の栄光に比肩する文明が現れることは今後永久にないだろう。「それをもたらした人種の組み合わせと同じものはや生じえないからである」⁽²⁹⁾。

ところで、共和政体あるいはデモクラシーという名の絶対的体制は、半分以上「セム化」されたギリシア南部で顕著であったが、アーリアの純血性を維持している北部の地域、たとえばマケドニアやエペイロスでは王の権力のもとに統治がおこなわれていた。ゴビノーに言わせれば、アレクサンドロス大王の出現はこのようなアーリア的素地があったことである。⁽³⁰⁾そして文明の性質や民族の資質の点でペルシアに引けをとるマケドニアが勝利を収めたのも、ひとえにこの指導者の傑出した政治的手腕によるのである。けれども東西文明の融合を目指したアレクサンドロスの企図は、人種的観点からすれば、異人種の混淆を助長するものにほかならない。アレクサンドロスの死後、マケドニアを含むギリシア社会全体は「セム化」を余儀なくされ、次第にアジアの補完部分といった観を呈してくる。「セム

化」された社会を特徴づけるのは満遍なく地均しされた「単一性」(unite)であり、文芸・哲学・道德・政治など様々の分野において、ヘレニズム期の社会原理となったのは「調停への愛」すなわち「折衷主義」(eclectisme)であった。各国家が人種的区别に従って截然と分かれていたときには、「特有の文明、独自の思想の発展、一定の国民への知的な力の結集に対する動機⁽³¹⁾」が存在したが、いまや旧来のナショナリティは消滅し、各人種に固有の面立ちは失われたのである。「差異への意志」に人種のエネルギーの集約を見るゴビノーにとって、歴史はまたデカダンスへの一步を進めたわけだ。

次にローマの時代が来る。ローマ帝国の盛衰は後世の多くの歴史家にとって同時代の歴史を読み解くための鍵として、汲めども尽きぬ知的関心の源泉であり続けたが、ペシミスティックな歴史家なら誰でもそうするように、ゴビノーは一貫してローマ帝国の衰亡過程を近代文明の頹廢とパラレルに捉えている。

「(……) われわれは近代の社会国家を構成するすべてのものをフォーラムに持っていないだろうか？ パン、ゲーム、無料配給、享樂の権利を要求した下層民。公職の分け前を求め、わがものとしたブルジョワジー。次々と転変を強いられ、つねに後ずさりし、つねに自分たちの権利を失って、ついにはその支持者でさえも、唯一の防衛手段としてあらゆる特権を拒否することを承諾し、万人の自由しか要求しなくなった貴族階級。これはまるでそっくりの光景ではないだろうか？」⁽³²⁾

ゴビノーはローマ史をいくつかの局面に分けて検討しているが、決定的に頹落へと向かうのは、ギリシアの場合と

同じように、セムの血の流入が契機であると言う。版図の拡大に伴う異人種との接触は混血を促進し、身体的には「中背、か弱い体格で、見た目には一般に褐色、血管にはおおよそ考えられるあらゆる人種の血が少しずつ流れている」ような凡庸で取り柄のない人間、精神的には「横柄で、卑屈で、無知で、手癖が悪く、墮落しており、いつでも妹、娘、妻、国、主人を売り飛ばす用意ができていて、貧困、苦痛、疲労、死をむやみに怖がる」といった不埒で頹廢的な人間を産出する。⁽³³⁾文化の方面でもローマ独自の相貌というようなものはなく、「宗教も、法律も、言語も、文学も、確固とした実効性のある優先権さえも、ローマは何一つ固有のものとして持たなかった」⁽³⁴⁾。

このようなギリシア・ローマ世界の没落を招来した原因としてゴビノーが指摘した「セム化」(sémittisation)について、ここで若干の説明を加えておくべきであろう。現象的には、それは白人の血に黒人の血が混入することであると理解してよい。帝政ローマの歴史に即してゴビノーはこう説明している。

「私は帝政期に対してセムの(sémitique)という名前を与えた。この言葉を、かつてカルデア人とハム人との混血から生まれた人種と同じものを指すかのように理解してはならない。ただ私が示したかったことは、ローマの財産とともにカエサル支配下のあらゆる地域へと拡散していった群衆は、その大半が黒い血(sang noir)のかなりの混淆によって影響を受け、そのために様々な程度において、セムの融合(fusion sémitique)と同じではないが、それと似たような一つの混合を表していた、ということである」⁽³⁵⁾。

周知のように、ゴビノーに反ユダヤ主義者の嫌疑がかけられた一因はこの「セム化」の概念にあるのだが、ゴビノーはこれによってユダヤ人の政治的・経済的・文化的な世界支配を批判したのではない。「セム化」とは、世界全

体の人種的地盤沈下を惹起する混淆という現象を、優等人種たる白人の側からシンボリックに表現したものであり、「セム」であれ「アリア」であれ、その血統はユダヤ人やドイツ人といった具体的な個々の民族なり国民なりが特権的に代表する筋合いのものでは決してない。むしろゴビノーは、困難な状況にあっても偉大でありえたユダヤ人を称えて次のように書いている。

「ユダヤ人 (Juis) も〔その他の自然条件に恵まれなかった民族と〕同じような状況にあり、みずからの言語と類縁関係にある言語の方言を話す部族に囲まれ、その部族の大部分は自分たちとかなり近い血縁関係にあった。しかしユダヤ人はこれらすべての集団を凌駕していた。彼らのなかには戦士や農民や商人がいた。王政、神政、首長の家父長的権力、議会と預言者によって代表される人民の民主的権力が、非常に奇妙な仕方で均衡を保っている極めて複雑なこの統治のもとで、何世紀にもわたる繁栄と栄光を享受し、領土の狭さが突きつける勢力拡大の困難を、最も知的な者たちの移住というやり方で克服してきた。それではこの領土はどのようなものだったのか？ 現代の旅行者は、イスラエル人の農学者がどれほどの知的努力を払ってその人工的な肥沃さを維持していたかを知っている。この選ばれた人種がもはや自分たちの山岳地や平地に住まなくなって以来、ヤコブの家畜の群れが水を飲んでいた井戸は砂で埋められ、ナボテのぶどう畑は砂漠に浸蝕されてしまい、まったく同様にアハブの宮殿の跡は茨で埋め尽くされたのである。それではこの惨めな世界の片隅で、ユダヤ人とは何だったのか？ 繰り返して言えば、自分たちの取り組んだことすべてに関して巧みな民族であり、自由な民族、強力な民族、知的な民族、そして勇敢にも武器を手にしたまま独立民族の資格を失うまでは、商人とほぼ同じ数の博士を世界に

送り出していた民族なのである」⁽³⁶⁾。

こうして『人種不平等論』を論拠にナチス・ドイツの反ユダヤ的な人種政策を正当化することは無理であり、それはゴビノーを「人種主義イデオロギーの父」として捉える研究者でさえ認めているところである。⁽³⁷⁾とはいえ「セム化」が「黒い血の混入」と同義だとすれば、ゴビノーにおける反セム主義は黒人差別を擁護するものではないかという疑惑が生じるであろう。実際この本は、早くも一八五六年にアメリカの反奴隷解放運動を支援する人々によって英訳、出版されていたのである。⁽³⁸⁾しかし、ゴビノーは黒人へのみ与えられた官能性、芸術を育む想像力の源泉に抗したい魅力を感じていた。みずからの詩的才能を信じ、芸術家を自任してもいたゴビノーは、白人のアポロンの契機と並んで、黒人のディオニュソスの契機を人類史を構成する本質的なファクターと考えていたのであり、その抑圧や排除を鼓吹したことはない。「黒人であることは、一つの人種であるというよりも、まさしく一つの病いである」⁽³⁹⁾とまて言い放ったミシュレなどに比べれば、「知的価値を問題にする場合、私は「すべての黒人は馬鹿である」というような立論の仕方を拒否するものである。私がこうした立論を差し控える主な理由は、バランス上、すべてのヨーロッパ人は知的であると認めざるをなくなるからであり、私にはこんな不条理はとも考えられないのである」⁽⁴⁰⁾という発言は、遥かに抑制のきいたものであろう。次節で述べるように、アメリカの奴隷制についても、ゴビノーは決してそれを支持していないのである。

ローマに戻ろう。ゴビノーは、いわゆる「蛮族」(barbare)の侵入がローマ文明を崩壊に導いたという考えは間違いで、事実はその逆、「セム化」によってすでに衰退の途上にあったガリア・ローマ人は、北方のアーリア・ゲルマ

ン人 (Arians-Germains) なしに帝政を維持することは不可能だったと説明している。「要するに誇張なしに言えば、帝政ローマが善と認めたもののほとんどすべてはゲルマン的起源に由来するのである」⁽⁴¹⁾。ゴビノーによれば、アーリア人種の本流に属するゲルマン諸民族は、アーリア的特性である高度の知性と横溢するエネルギーを具え、これによって黒人的な情動と黄色人的な物欲を克服し、自他を厳しく律する戦士的なモラルを体得していた。彼らは国家によるアイデンティティの保証を求めず、群衆のなかに溺れてしまうことを忌避し、他者との差異に生きようとする個人主義者であった。

「ゲルマン世界を見て最初に考えることの一つは、そこでは個人 (homme) がすべてで国家 (nation) は取るに足らないということである。そこでは集まった群衆 (masse) よりも個人 (individu) のほうが先に目につくが、この基本的な状況は、セム人、ギリシア人、ローマ人、キムリ人、スラヴ人の混血集団 (aggrégations) が見せる光景とより注意深く比較すれば、そのぶんもっと興味を惹くだろう。そこにはほとんど群衆 (multitudes) しか見当たらない。個人はものの数ではなく、その民族的混血がいつそう複雑であるため、その混乱もいつそうひどくなっており、それだけ個人は消え去るのである」⁽⁴²⁾。

圧倒的大多数の群衆と対峙する独立不羈の個人というイメージは、四八年の騒擾から得たものだろう。ここでは血気盛んな北方ゲルマン人が、烏合の衆と化したガリア＝ローマ人を征服する段取りである。「美德も悪徳も、欠点も長所も、到着した民族のうちにあるすべては、文明世界の様相を一変させるように結びついていた」⁽⁴³⁾から、侵攻はどれほどの野蛮さを伴わず、ローマ世界のゲルマン化は徐々にだが確実に進んでいった。ゴビノーの説明に従えば、三

世紀から五世紀まではゲルマン人はまだローマ社会の改造に着手せず、現存秩序を維持していたが、五世紀から八世紀にかけてゲルマン要素を触媒として「ローマ性」(romanie)の価値向上、改善と蘇生が遂行された。そして近代ヨーロッパに文明の名に値する業績があるとすれば、それはゲルマン的な軍人氣質に支えられた封建制という階層的支配体制を確立した中世に負うとゴビノーは見なしている。

しかしながら、すでに指摘した混血作用の「両刃の剣」とも言うべき二面性、つまり「小さなものの増進」と「大きなものの減退」というジレンマをも認識しているゴビノーは、手放しに中世を讃美することはできない。ゲルマン要素とローマ要素のせめぎ合う中世は、「セムの血による退化」と「アリアの血による再生」という二つの過程の相克であり、「ローマのゲルマン化」は同時に「ゲルマンのローマ化」を意味する。そして「ローマ性は数のうえで蛮族を遙かに圧倒する人間集団を表していたので、このローマ性は波が岩を浸蝕するように、ついには支配者を疲弊させ、支配者よりも生き長らえたに違いない」⁽⁴⁴⁾。中世を通して「世界的な平準化」(nivellement universel)が驀進し、アリア人を識別するメルクマールも消去されていく。まずフランスにおいては名誉観が変貌した。アリア人本来の名誉は戦士の威厳と一致するものであったが、やがて大権を握る国王に対する絶対的献身、財産も自由も生命も犠牲にする一つの義務へと墮してしまった。それはもはや「帝国的諸観念の上のゲルマン的メッキ」にすぎず、貴族も一皮剥けば奴隷と選ぶところはない⁽⁴⁵⁾。またアリア人の卓越した政治的能力もローマ化によって骨抜きにされ、「イタリアは政治的活力を芸術的・文学的才能の大いなる発展と取り替えた」⁽⁴⁶⁾。こうしてついに十五世紀末、ローマ性の勝利Ⅱ再生としてのルネサンス——「千年かけてつくられたものに対する容赦のない暴力的な十字軍」——を迎える

ことになるのだ。

「正当にもそう呼ばれるように、この再生 (renaissance) において、すなわちローマ的基礎のこの復活において、ゲルマン的本能を捨て去った人々のなかに入っていけばいくほど、ヨーロッパの政治本能は軟弱になるのである、ここにおいて、諸個人の状態における微妙な差異ニュアンスはより小さくなり、統治権力はより集中の度を増し、臣民はより多くの余暇を手に入れ、安楽と贅沢への執着が強まり、したがって新様式の文明がいっそう見られたのである」⁽⁴⁷⁾。

行論上の必然として、ここでのルネサンス評価はネガティブにならざるをえないが、ゴビノーは十六世紀イタリアを全否定したのではない。七月王政下の金権政治を批判し、ひいてはヨーロッパ近代文明を相対化する視点を、若きゴビノーはオリエント世界とイタリア・ルネサンスに求めていたからである。⁽⁴⁸⁾ ルイ・フィリップ治下の政治家やブルジョワジーの百鬼夜行に辟易していたゴビノーは、豪胆な英雄のみが持ちうる徳 (virtu) を渴望し、十六世紀イタリアの傭兵隊長に一つの理想的人間像を見出していた。このようなモチーフの延長線上に生まれたのが戯曲『ルネサンス』であり、爛熟した文化と軽佻浮薄の気風、大衆的なデカダンスのなかにあって、「ヴィルトゥ」を保持するある種のエリートの姿が、ゴビノーの主たる関心事として浮上するのである。時代の腐敗の相に焦点を合わせたのが『人種不平等論』であったとすれば、デカダンスを逞しく生き抜いた英雄たちを活写したのが『ルネサンス』であると言ってよい。ビッディスの適切な言葉を借りれば、「それは主観的印象に基づいた英雄たちの描写である。支配を夢見るチェーザレ・ボルジアと外国勢力からのイタリア解放を夢見るユリウス二世。政治的失敗と腐敗の時代のなか

で個人の持つ芸術的才能の卓越性を披露するミケランジェロとラファエロ。それはデカダンスの只中にある偉大な人間たちの研究なのである⁽⁴⁹⁾」。

ゴビノーにとってルネサンスとは、アーリア人の政治的・道德的活力の下降線とローマ的な芸術的才能の上昇線が交わった時代であるように思われる。そこにはまだ幾人かの政治的・芸術的英雄がいたという意味で、それは人類史における束の間の幸福な時代に属するかもしれない。十六世紀以降のヨーロッパに、そのような時代が再び訪れることはない。近代、すなわち「平等の時代」(âge de l'égalité)が、全ヨーロッパを洗い尽くすからである。

(1) もとよりゴビノーの物語る「歴史」は実証的な次元に属するものではなく、『人種不平等論』第一部で提示された命題を証明するために加工されたものである。それは一種の循環論法に依拠した証明であって、カッシーラーも指摘するように、「彼のあげる事実は、つねに彼の原理と一致している。なぜなら、歴史的事実が欠けているときには、それは彼の理論に依拠して挿入され、作り出されるとともに、さらにこの同じ事実が、その理論の正しさを証明するために、再び用いられるからである」。カッシーラー、前掲書、三〇二―三〇三頁。

(2) *Essai*, pp. 632-633.

(3) *Essai*, p. 395.

(4) *Essai*, p. 472.

(5) *Essai*, p. 472.

(6) 「アーリア人」という概念をポジティブに定義することはできない。「アーリア」はもともとサンスクリット語で「高貴な」という意味を持っていたにすぎない。十八世紀末、イギリスの東洋学者ウィリアム・ジョーンズは、サンスクリット語とヨーロッパ諸語の構造的類似性に注目し、「語族」の着想を得たが、これが後に「インド・ヨーロッパ語」(トーマス・ヤング)とか「インド・ゲルマン語」(フランツ・ボップ)などと呼ばれるようになり、十九世紀半ばにF・M・ミュラーに

よって「アーリア」の呼称が採用された。その過程で徐々に言語系統が横滑りの人種系統と同一視され、ヨーロッパ諸語の祖語、「アーリア語」を話していた「アーリア人種」の存在が措定されるようになったのである。なお今日では「アーリア人」のスペリングはAryenであるが、当時は一定しておらず、ゴビノーはArianと綴っている。

- (7) *Essai*, p. 488.
- (8) *Essai*, p. 1143.
- (9) *Essai*, p. 486.
- (10) *Essai*, p. 498.
- (11) *Essai*, p. 557. しかしゴビノーは、キリスト教信仰を基盤にヨーロッパ社会の安定化を図るというトクヴィルの立場には与しない。

- (12) インドと中国は、アッシリアやエジプトと同様に、その周辺に多くの派生的な社会を抱える指導的国家である。ゴビノーは、インド志向型の社会として、セイロン、ジャワ、バリ、スマトラなど、中国志向型として、日本、朝鮮、ラオスなど、中間型として、ネパール、ブータン、チベットなどを数えている。文明の派生効果がここでも確認されるわけである。

Essai, pp. 603-604.

- (13) *Essai*, pp. 582-583.
- (14) *Essai*, p. 506.
- (15) ゴビノーは仏教に対して極めて批判的である。「インドにおいてバラモン教は非常に変質していたとはいえ、白人原理の正当な優越性を表していたが、それとは逆に、仏教徒は劣等集団の抗議を試みたのである」。 *Essai*, p. 549.
- (16) *Essai*, p. 551.
- (17) *Essai*, p. 552.
- (18) *Essai*, p. 595, n. ^{*}.
- (19) *Essai*, p. 625.

(20) ヘーゲル『歴史哲学講義』長谷川宏訳(岩波文庫、一九九四年) 参照。

(21) *Essai*, pp. 661-662.

ゴビノーはギリシア国民の構成を次のように整理している。*Essai*, pp. 664-665.

① ギリシア人——黄色人原理によって変化を被ったが、白人的本質がおおいに優勢で、セム人と若干の類縁性を持つアーリア人

② 原住民——黄色人要素で飽和したスラヴ・ケルト系住民

③ トラキア人——ケルト人・スラヴ人と混血したアーリア人

④ フェニキア人——黒色のハム人

⑤ アラブ人およびヘブライ人——混血著しいセム人

⑥ ペリシテ人——おそらくより純粋なセム人

⑦ リビア人——ほぼ黒色のハム人

⑧ クレタ人およびその他の島民——ペリシテ人になりに似通ったセム人

(22) *Essai*, p. 670.

(23) *Essai*, p. 676.

(24) *Essai*, pp. 678-679. 強調は原文。

(25) *Essai*, p. 680.

(26) *Essai*, p. 678, n. ²². 強調は原文。

(27) *Biddiss, op. cit.*, p. 172.

(28) *Essai*, p. 696.

(29) *Essai*, p. 698.

(30) ゴビノーのアレクサンドロス大王への関心は持続的なものであった。一八四七年には五幕からなる韻文悲劇『マケドニア

人アレクサンドロス』を書き上げ、コメディ・フランセーズに持ち込んだが、受け入れられなかった。また晩年のゴビノーは彫刻に熱中し、複数の彫像を製作したが、そのなかにはアレクサンドロスの胸像もある。

- (31) *Essai*, p. 711.
- (32) *Essai*, p. 292.
- (33) *Essai*, p. 922.
- (34) *Essai*, p. 898.
- (35) *Essai*, p. 911.
- (36) *Essai*, p. 195.
- (37) Biddiss, *op. cit.*, pp. 124-125.
- (38) 一八五五年一月、ゴビノーはグリドン博士 (Dr. Giddon) なる人物の訪問を受けた。アレクサンドリア駐在のアメリカ領事を務めたこともあるこの人物は、おそらくすでに出版されていた二巻分に目を通してのことだろう、反奴隷解放運動の指南書として『人種不平等論』を翻訳したいと申し出たのである。アレントは「ゴビノーは彼の理論をひっさげてアメリカの奴隷問題論争に加わることで人々の注目を得ようと空しい努力をした。この目的のために彼の全理論体系を白人種と黒人種の闘争を基本とする体系に組みかえてもみた」(前掲書、八三頁)と述べているが、そうではない。ゴビノーは当初からこの英訳の企画に当惑し、みずからの著作の政治的利用に不信感を抱いていた。しかし結局、この翻訳はホッツ (Henry Hotz) やノット (Josiah Nott) らの手によって『諸人種の道德的・知的多様性』(*The Moral and Intellectual Diversity of Races*)と題して一八五六年にフィラデルフィアで出版された。案の定、全体にわたって恣意的な注釈を施され、黒人の優れた特質について触れた部分など不都合な箇所は削除した、党派的色彩の濃いものとなった。翻訳の冒頭には「博物学者というよりも政治家にして歴史家の観点から熟考された最初の人種論であるこの著作は、アメリカの政治家たちに謹んで捧げられている」という言葉まで添えられて……。
- (39) Michelet, *Histoire du XIX^e siècle*, in Boissel, *op. cit.*, p. 132.

- (40) *Essai*, pp. 312-313.
- (41) *Essai*, p. 923.
- (42) *Essai*, p. 982.
- (43) *Essai*, p. 1016.
- (44) *Essai*, p. 1044.
- (45) *Essai*, pp. 1090-1091.
- (46) *Essai*, p. 1082.
- (47) *Essai*, p. 1094.
- (48) 物質主義・功利主義・生産至上主義に侵された近代ヨーロッパの精神、「進歩」と「啓蒙」を信仰箇条とする西洋近代に、東洋の深く静かな「叡智」を対置する姿勢は、「われわれの考えることのすべて、われわれの考え方のすべては、アジアにその起源がある」という一文から始まる『中央アジアにおける宗教と哲学』にも貫かれている。
- (49) Biddiss, *op. cit.*, p. 238.